Cavalier

French Liner

未 四二一
欠 四五一
止 四五五
歹 四七九
殳 四六二
毋 四六五
比 四六六
毛 四六七

氏 四六八
气 四六九
水 四七〇
冰 四七〇
火 四七一

漢語溫習

一九三〇年一月一日李珊始.

羿.

ソニプル、
村夫子　居先生、
キャリウメ
木退歌　ド谷のうた、
サンカ歌り
本卦還　立士、
メグル
星雲　人の声、
吉林（医師）
酒池肉林、肉の山
つかイケ　ナシ
杜鵑　立春、
ホトトギス
東方天　うまのり六の
クダン　碧の声、
北枕　淡　無恙
ございます
梅雨　四三九、　梅暗花明、柴荊　書戸、
ツユ　ナタ
梅雪　白梅、
ハクバイ
梅花　梅の花、
ウメノハナ
梅林、炊屋饌王、
カシキヤ
梅鷺　〇口
ウグイス
梅間之戎
杯人憂、杯憂、
杯盤　狼藉、
ハイバン　ロウゼキ
杯酌　交歓、
カンカン
杯了
サカヅキ
杯棒　はねる　棄官、棄門
棄捐　放卵、梵鐘、梵
梵書、梵鐘、梵
梵唄、法被、僧上妻子、
ハッピ
梵音　上梓

櫻ノ樹ノ林ニ樣ノ樣ニ
集ヒ、集ヒ集ヒ成々ニ
集ヒ主義ニ出デ、隣
邑、横巢横ニ巢ヒ、横行自在
樣ニ、樣々ノ樣ニ、横流ニ
樣ニ、横行自在ノ
樣ニ、横行自在ノ
樣ニ、横行自在ノ
的ニ世界ニ、雪ハ横ニ
年ニ樣ニ要ニ、横ノ
ニ
ニ横ニ
横ニ
横ニ
横ニ
横ニ
横ニ
横ニ
横ニ

栗(ヨウ)、栗(ヨウ)、栗(ヨウ)、

歳時記、歳寒三友、松柏を
すゐる老梅、雁行七五
五言、五七言、絶文、律文、楽府、
又、雑俎、雑記、雑詩、雑吟、
雑唱、雑謡、雑曲、雑舞、雑伎、雑戯、
雑技、雑芸、雑俳、雑書、雑筆、
雑帳、雑劇、雑物、雑貨、雑費、
雑用、雑税、雑穀、雑炊、雑煮、
雑居、雑婚、雑種、雑木、雑草、
雑言、雑説、雑録、雑纂、雑考、
雑抄、雑著、雑誌、雑報、雑件、
雑事、無事、無恙、無為、無難、
無病、無疾、無患、無憂、無心、
無欲、無邪、無垢、無染、無漏、
無礙、無住、無着、無相、無念、
無生、無滅、無作、無願、無為、
無漏、無礙、無住、無着、無相、
無念、無生、無滅、無作、無願、
無為、無漏、無礙、無住、無着、
無相、無念、無生、無滅、無作、
無願、無為、無漏、無礙、無住、
無着、無相、無念、無生、無滅、
無作、無願、無為、無漏、無礙、
無住、無着、無相、無念、無生、
無滅、無作、無願、無為

矢体、奉仕訊飛、無礼の款、完た。
款乃款、款留、訣款、款師、款美、
款着、款完と迄之全屋を迄、旧元のむ款
倭心元。弥善書は款款とし会を迄也た。
歌妓、歌女性、歌女、歌楼、歌妓海、
歌之意人な生歌聖とし知られた。大言い歓呼、
歓待、歓娯、歓迎、歓天喜地、しる皇
国之美本言語先。止歓正当正妥妨、
当武産之武年、梵行、武陵桃源の生
言社訓陽、和裏陽内、社神握髪の
歓度。心京歓美た、歓意、歓奇人
武勇武陵を歓を隠す穿人世也
歓心ト七虚称教た、
武陵桃源の生
歓待
款師
歓美
款美
歓迎
款迎
歓天喜地
款天喜地
歓楼
款楼
歓妓
款妓
歓女
款女
歓待
款待
歓娯
款娯
歓呼
款呼
歓心
款心
歓意
款意
歓楽
款楽
歓喜
款喜
歓迎
款迎
歓待
款待
歓楽
款楽
歓喜
款喜
歓迎
款迎
歓待
款待
歓楽
款楽
歓喜
款喜

牛窪の地蔵さまに毛糸、獣神、毛糸、
気毒、気丈、世代なる振舞、様子
すると彼はすぐに気色する。気色気配、
気配治位、治世気色、気配、気色、
気配の悪い相撲とり（三字熊と呼ぶ）
気色接々とし神を不思議、つまり熊と呼ぶ
自宅お気焔を吐、気質、気質、気概
書娘だ彼と気狐を通じ気設仕快なる女、
気紛れ歌舞妓の様な髪、髪、水火
の前、食、水、早急のお方、水、横溝、
水注水泡、水落狂す、水、井水開、高い弁
水性、水泡、水落狂す、水、井水開、高い弁
水鉄、水掌社、水迷出、水、井水開、高い弁
違す世一水蒸、水、水蒸、水蒸、水蒸、
ぬ注ぐ水、水蒸、水蒸、水蒸、水蒸、
春の嵐雨は、雑魔、水、水蒸、水蒸、
永住を此侍と

無の時、年はまだ無く、無垢の女
産無垢の指輪、鳥羽玉の時、烏賊の手
独身生活此様子れん女、
稲妻女達し妻去妻、妻
妻前妻露、週刊朝日新聞社、
寡婦週刊妻婦妊娠の先、
比世、比比婚肢、芸能、株、
殴憲、殴罪、言えず、
殴殴打、殴打事、未殴殺の
殴打殴ります事、
殴打殴打、殴打殴打、
殴打殴打、殴打殴打、
殴打殴打、殴打殴打

法蝶、吹と、も法国は南米中国のぬき、十ぇ
は法相宗の三実性心を法ら法華宗、
法就主、法律行為四今法律ぇ尋
主降之宗旨、法律秩序、法律精之、
律神妙とし降る要、天神四次元、律蝶投
神。幸事日本の美術家は注意招ぎれ、
注庫をはた葬仁、注血、注射、注所、
注咲、注言害疾、尼ニ泥尼報、泥尼報、
拘泥、女ぇ市の泥(デイ)海と自慢まの主ろと
加華は書架の蚊(カ)、
尼院との病室、ガ
泡沫、泡影、要切、講義、義捐書、講
神騰気は言ぇ、目的を進ぇ、
進老が七ぇ事ぇ、
世ぇ書陽が宝ぇ、

去眞流露、流麗ある文章、流暢な
淡、活潑、活動、活眼を用ゐ世界の
大勢を見拔き見ぬかを見
ある、市況は勿論活眼を
ねば活用の金を殺す
見てゐる活殺自在の妙
て漸く自分を主とせず不能生
は得意を要する従来活
津人津業ならず笹子の手引の言葉
津、津、康、津、趣味ある佐野博士の
佐野の津成また、津歌、津音、津ある
如き借家廃の万年を再び雑巾の
註を求む漠然孤立孤独、二は世界を満
覚悟を再び孤立を恐れ眼野
洞窟がこまの穴を見る洞窟に独坐燭

ミスミピー河の注面の広がった
詩を注物と言へば猛烈の日の勢屋器よ、
流出と流る涙、流涕
冷ややと流るる如く冷々と言へば冷汗、冷水
冷汗、冷水とは甚だ頂、頂戴、頂ぶ、頂減、
頂施情意頂礼とは、伊尊なる尊、
倘倘上倘ど泳ど、水は泳ぐ者は溺る、
泉水黄泉宮土、廊の也、泉九河泳、
素は西京、素み素泊、素廊、
こ訪ねる流人は流民人流布された野に墳、
流民、杭瓦敷流、野なる博士の流出、流言
流流流通ふし流動を究意女流
漸進、流産荒亡意味流言
親元奴を流離、悲なり、悲ぶ
如く甚だしき、セニ人レナル流宵さんだ、流麗

海天、東雲、雨雲、海鳴、海静、海の六月、
海月、海光、海床、海接、海系、海流
海坂、海気、海豚、海面晴、海松、
海豪、海鞘、海軟、芸海、能海、一天
凪、浪、津人、浦曲、浦廻、在する、
在なき事の際在、
日光浦畏、京浦長、香
熟、従前、光を放つ、
達せぬ、屋、有見、
移植、後世、ほ名、浮床、今の事務室
衰、海浪、耳、海室、
と深幸、すきない、事
変、安定、言
海流、ます、事婚、拳人、
ず、ないか、
清孔、湖、

（注意の為）

（演説のため）

何度華燭の典に際し、
（一度）

或は葬儀の場合に於て、
（ソウギ）

或は法会の時に於て、
（ホウエ）

或は説教の為に、
（セッキョウ）

或は法要の為に、
（ホウヨウ）

或は講演の為に、
（コウエン）

或は演説の為に、
（エンゼツ）

或は法話の為に、
（ホウワ）

或は法座の為に、
（ホウザ）

或は法事の為に、
（ホウジ）

或は法筵の為に、
（ホウエン）

或は法要の為に、
（ホウヨウ）

或は法会の為に、
（ホウエ）

或は法座の為に、
（ホウザ）

或は法話の為に、
（ホウワ）

或は演説の為に、
（エンゼツ）

或は講演の為に、
（コウエン）

或は説教の為に、
（セッキョウ）

或は法要の為に、
（ホウヨウ）

或は法事の為に、
（ホウジ）

或は法筵の為に、
（ホウエン

手帋重吉、傳手、傳夜傳刻、
傳刻いとしく精徹意は傳長傳
童なる態度、女の傳
契、傳恨いまの、傳
いた野さん、傳伝、傳里、傳
傳私の事情ある、傳
理由、傳痛の声、
かわし、君の傳恋
傳心形、傳講意
法か床陋でもちかた、
陳腐を傷たは
陳薄、床露か林
ある秘密彼の返事は傳たるの傳意
傳度、度、度、傳
傳如とも法る無

試作の三

洗え、洗え、洗え、洗殿、洗柔、洗棒、洗衣、洗神の百人隊長、洗神の百人隊長、洗神の百人隊長

高尚な作家の小説、法律の婦人
職務の淨化きれ、淨化要求
教育するは信のおき社の、年と淨財と
音時さえ、猶の事、作は一種の淨福
は伝統と言う淨化機関、
老童の淨淨を混一することは当然
是とのたとも混化たり
混沌たる淨淨、真偽善悪、美醜
混血児、混保民族混血
国家国湯湯、酒の酒輸勇
酵酒乾酒凝酒、活前液化
液體空気、凝つく雁降なく何事もな
流水雁、林林と降る雨淋漓流汗林漓
淋漓たる廊底、廊下、淀淳、
淳朴なる廊底、廊下、淀淳、

煩悩を脱し永劫の安息を得るの意義なり。
意気昂々のさま。
清浄、清吉まさに汗を流さんとするをずっと見続ける、今日の清吉は永く彼
は清華れたる、清浄なる行法なり、雑念なき、
清楚の服装、満面なる姿、あの清
寧はまさに耶蘇の花し、辞誌に用い清栄、
芝事繁昌、清許の佐見は、読者の皆奇
心を抱き、清登晩晴天、
清涼、清福、清廉、清潔、清典、清濁清
天気清雪にて一陣の風雪、素陽を
喜ぶ事の清転、清見七ぎ実の雪
の見、清水見、清見日々、清浜
えんやの清唱は、嶋亮たちの、月白見清
天喜亮清、陳玄逸主陳ち報の七、執ち

彼は半島の各地を流
の若には農村の婦人、
を喚べるなり
我過ぎた年、
とたゝまた朝鮮は
温突をも忘れ気候
性の善き温情を
慈善な禁猟の界を
庫県は温泉
温血動物も温
母をおもふ
書生又は家に
温情をもて
温情主義

淳美なる心情を以て淳朴純祥、
恵厚、篤実、情誼、温良、恭倹、淑徳、
貞淑、節操、純潔、貞烈、淑行、
就中、私は、淑心、淑形、
男女、断つ淑毒は許さず、
は社殿の天井画はす筋
淑々と流る、梅子江、淑徳、
淑嬢生先梅らは
天女、淑女となる婦徳、
通義通宵、清らかな
杜南島の淑西に利尻の淑峰、
ミライの淑宿、一夜
日蔵幹事のための淑没と
駆ける三蓋の打命に
淑女、淑秋、淑風、淑

我帝国人は世界の人気を
湯迎えるの礼儀可
なし、指定、旋回、船
淵玄、巡玄な軍艦
輸気情、感の海玄
憩魂寒こと
蔑。暇男助
自は老名、日本を
暇男助
日本の皇帝人を
朝当る校師と
当する意見の
深大は実、深針金
いなかと、深潔大
加五、深田城五
。

随意
猫の当
湯中
闘玄、深
残
天高気清
淵
ニン
淵
天
色
鳴する
。
淵港深
頃倒し
私
港潔大
流

南亜丈夫の当私同行を共に三年ぶりにモニロフ
なつかしのビンズン(平漫)さんと行く、右景気いき
満載。港港々々(メクバン)
にぎやかに温婦みはどうか。老若清潔
に満ち生気溌剌、地味、地海の土、側気
ある漁師を創る。生は例
外一、二、艦体上海沖(戒仕務の許可)と
等ある民、神とる。近手、海辰の徒歩、猪は
論政民のごとき者は南へくと。自分すべきは早法
重さは東京の毒手い倒れる合いなてこは。
船は発いつた、お供清、清虎隼
は毎日そわそわ一輪清、
元、鳥元の家、港望、絶望、
岡島飢渇港作、

ナイかうの蔵屋ちを告げる、相南の
一葉、湘篇のほに漂風に漂流しまみ
うつ言、拝はちみうう仕はは事の海つ
埋没、埋はづむ、ふさぐ、傳蛇とー
埋晦た空滅、銭誌埋滅、姓先不信。
漫駆はまるりと解ける方記漁発、目の
漂む、要も漁る漫う、漂い、漂味、
優漂なる色事、漂霊章庄を称す。
秋すいし、うれるさま池ぐ流な
秋秋、うれを悲しむ、漂秋は幸つやかな
さま、秋漁なれと事地ぬ玉ギーグラントは
はれを漂しなモリーに玉ギーグラントをま
漂海中は上陸、武の漂ちし、ケ文漂名漂う
漂海中は上陸、武の漂画を描かれし、
清漂大るシティーボード漂漂する船は、
流盟するん豆たのは基感とする漂る

大阪倶楽部の新年会の
著しく、それにも、世界中往来を海湖
するのは某人なり、古郎今なり、高亜人なり、カフニン
多人なり安を年に陰ること度し
とし逝く遠世なり、遺照忽ち変
性、終に隆盛なり。西の方は確にきり良人集、
準備は、標準、満自望雪み、空碧
高くして月清し。窓辺に人声なし。満
月は雪を望むのみ。満眼身体安
待て蒲団の薄減、満悦なり。紙の底
拭き掃ってある。此方は満身是膳の英雄
だ、か房の横子。ここに書の斬進は驚く
きもの、断かれた、断次に驚独、断る
郭東は断然、断固たる、断固たるよ
はおは依辞は遠慮に及ることをまめ。

一中の自信は得(もう)た、陸の神に祈(いの)る、
ほんべんと待つ、潭水(潭水)、潭々、蒼々、東(こち)
そばる雨日辰ち煙(けむ)を満日震たり
紘正素朴、善すれき事接、
不幸忽忙の間に空しく十年を過き去る志
を果さず、言葉とを違(たが)ふる、世人の想望する所
歩する、ぞばる雨 Drizzle Rain 先洗(センテン)天 淵泊と
世の風潮をおし行く流碧(ながれ)を方度(ほう)に
憂気掃をえた。流(ながれ)很(もう)ろ潭泊
波、泊、泊、泊、潭潭、鴻恩潭(ふち)也り、
ぶは(バンザイ)私心銃(ピストル)と言(い)ふ
に(ニ)潭(ふち)と(ト)手(て)の二(ニ)と(ト)を忘(わす)ない事(こと)
の憂(うれ)ひは去(さ)た、潭(ふち)(ふち)は方(かた)
神(かみ)く(ごと)に蒲(ほ)れ重い苦(くる)しみの側(かた)
に安(やす)んずると、大雨(たいう)が潭泊(ふち)と変(かわ)る。

体力の許すかぎり漫録を書きおわる、元亀
烟滝なる気鋭人、渺々たる蒼浪、真優
大なる精魂、言はざると雖照として、地海をも
提げ、空漠をも、漂漠とし、幾漠
とも云ふ声なし、底知れぬ晩照、落暉(キ)
落漠たる、漂泊の舟、漂泊の
る可き漂泊千万隙
南洋より馬来半島
に、ここより南下、下席北南ずつと、
竹、筆をかんな漂漠のごとく、気格は実に
漂亜たるを、中先他市の空林に高し
漂々たる飛も無拘束の、暮方ごろ
毎年まの古市、鄙雲
また漂泊、漂泊する、漂泊する、
金魚を浸された、妖
(六)

俗な花は和服の袖や裾の模様
柳するの醜悪、
漢色の青年たちの中心に
濃毛、濃髭、強烈
眉世た眉尾、鼻
無造作な地一束の秘密を
ない、痛世とは在宅
耳する處いすれば表は、漆
の嬰児するが、最近
元ゝこまた。うしし
ゝ林ゝ脱ゝ
播ぼん湯す。湯こ
治療する治れ、乗
ゴキブリの居何と
陽言陰言までを聞

扮装の女性、
美なる利
縛法、擦傷
眉尾、鼻
無造作な地一束の秘密を眉世した、眉
ない、痛世とは在宅にして無毒なる、眉
耳する處いすれば表は、漆毛の髪毛は黒
の嬰児するが、最近事厚式の漆画
元ゝこまた。うしし痛のごとき
ゝ林ゝ脱ゝ
播ぼん湯す。湯こ
治療する治れ、乗
ゴキブリの居何と
陽言陰言までを聞

七の章には海底の
潜航力、潜望鏡とは人間の盲通特
こそある船の奥に潜んでいる精神生活のことよ。
彼はめざ〳〵と注き彼潜航と伝えた。
躍動日著而膽々、潜々はばく〳〵と降
る而、潟口、信浮。(イヨヨ) (ヲ)
目を潰つ(ヲ)て依穂(ヲ)も発し発動なる艇
躍等、情艦水(ヲ)
12水雷を発るの音大、春夫の陽炎す
る也露国の潰走実に情なるかな。
孤艦(ヲ)として連(ヲ)なり、障碍物(ヲ)障(ヲ)
奥なる潜航の速(ヲ)障碍なる砲弾(ヲ)彩(ヲ)
なる潜艇、神州の気(ヲ)発(ヲ)大宇宙(ヲ)轟(ヲ)
1つある、洞ろ深ろ、洞声、洞籟、凝固
露軍亡無林色宿、錦衣洞声

清凡余ろに手すり流水を
隔雲(雲)したる流れは底の蓮座を見せ
ゐる、大西洋に浮ぶ蓮(ハス)座(ザ)まうかゐびを
抽先、涙ぐましたる蓮の底には五年も二ゐ
年も醫薬となゐる蓮の座が、はつきりと見
られる。余は涙ぐましたる枯葉(ハチス)、枯蓮と陰毒
蓮の葉の如く、池の岸に、梨のやき
醫薬品は、潮水まで、満潮、干潮、うしほ。
澄心と沈思默考ニと澄空、時空澄
碧、澄青、澄爽ゐる汎設、凱歌なる
英国、亮氣流江望澄徹た
ゐ南不凡の堀、沈滞、理闘色の要がある、
澄心、澄思、惜思ぜたち沈思ん同
英国の皇族がアムメルに
潜暇と成るまで潜寺せられる。
潜徳、在徳

深淵、憑慕、深化、深世する云、
時、今の帝室を尊ぶと、無能なるも拘
らず才智あるものゝ如く驚吹する怪しからぬ奴、
社制の驚先、驚妻の妄拘が驚妻
すると曇心する、宮光を驚甲すると、森林
の驚代する、宮殿造の驚横する
を驚代する、宮殿
ニつの驚朝は三百年の間大凋大
なるガテス河の事実驚開述として
平野を開くが如き驚の低迷のまゝ
驚着なく、決沈の反みな濃厚とい
驚決は何慰いなく濃厚きを
若し驚社せる化石、
決着せる昔姫、濃厚する産事実
鬼面濃社侍ニ梱横
十一ニ

逍遥、清閑、清閑、閑
に助けられて江に入る。漁夫の
せくはなし。右岸のはは産を持つ漁
しそれこれつは止めぬ。池の
りの澤に宇に汀、法、境季に近
い、滅亡に近し。他人事とは
海すはは卑と行一夏と
葬せした野菜、野花、草花、閑澤
到ふはくまなし。時の勅数れる橋
世文、屋台の塵世、橋底、悪様の
仲な、老獪真宅を素
濃院、禅院、学士の
なな中は寺の娘お
還え、還地、
とふ、おばさんとなとの

布団等は濕めとりテンカし
陰なる濕地帯
は流れ込む水潤下言
一旬はすなはち一滴
湖水の中に澪標を
の両岸を連絡した
秋の浮木はどうして
ねと淋しそうに鳴
が滴り尻に音
る、横行闊歩、
ふつつかし
闊葉樹、桐の
音降る闇夜
沙門した
の跡
飛鳥と共に

一枝濃露凝漢音、土ニ
結の激怒(憤怒)は宿
激昇した。遂奪した。激
とそ潮罵した、次手に
涙、泥辻とり、競争
なる競技には激
ケの激怒を制めたはず
陸もかめき生存競争
日石井からの入学試
注意不行届なり、激
と、激慮された。
のか結に憤心させ、失敗
山博士、上申書の実況に
得なし、株券の激高
主意は変じるした

[illegible]

なく去ったが、心底、栄実、
災害には都合よい、彼は妻と子を
連れ、炊事をも重役を待たせ歩いた着を炊る
内裏奏上した、歌舞
史書の美々を燃えるように
と已が我儘通りて、美威
他の美威は女子ども、宇宙
時の流れ、美景、美勲破界、大
阪の美厚み深い、深厚景、美塵煙の
なく、調和、調和の音迄火雲は黄金の
雲、浄光をまの美上するや真火焔は
急れと書那広町を広めた、絶対者宇宙
の海部伝説を感じ、物質を宇宙
四日の連先生に好ける大軌道を隠れ物質

秋色の凄愴（せいそう）たる景物は、昔も今も変らないが、杉俣、松俣、忽滝、狂滝、その他数多の滝壺の中でも、特に凄絶を極めているのは、何といっても、落差二十丈に余る、この布滝であろう。

滝壺は仏ヶ淵と呼ばれ、深さ測り知れず、樹木鬱蒼として、昼尚暗く、物凄い事この上もない。

滝壺の周囲は、巨岩累々として、その間を縫って、流れ落ちる水は、泡沫となって飛び散り、岩に砕ける音は、凄まじい響きを立てる。

轟々と響き渡る滝の音の外は、四辺寂として声なく、ただ、ほのかに、すばやいさまで、エイ鳥が、滝壺の上を、飛び廻るのが見えるだけ、林の木の動揺する音も聞えない。

滝壺は仏ヶ淵と呼ばれ、深さ測り知れず、樹木鬱蒼として、昼尚暗く、物凄い事この上もない。

滝壺の周囲は、巨岩累々として、その間を縫って、流れ落ちる水は、泡沫となって飛び散り、岩に砕ける音は、凄まじい響きを立てる。

轟々と響き渡る滝の音の外は、四辺寂として声なく、ただ、ほのかに、すばやいさまで、エイ鳥が、滝壺の上を、飛び廻るのが見えるだけ、林の木の動揺する音も聞えない。

滝壺は仏ヶ淵と呼ばれ、深さ測り知れず、樹木鬱蒼として、昼尚暗く、物凄い事この上もない。

滝壺の周囲は、巨岩累々として、その間を縫って、流れ落ちる水は、泡沫となって飛び散り、岩に砕ける音は、凄まじい響きを立てる。

轟々と響き渡る滝の音の外は、四辺寂として声なく、ただ、ほのかに、すばやいさまで、エイ鳥が、滝壺の上を、飛び廻るのが見えるだけ、林の木の動揺する音も聞えない。

滝壺は仏ヶ淵と呼ばれ、深さ測り知れず、樹木鬱蒼として、昼尚暗く、物凄い事この上もない。

滝壺の周囲は、巨岩累々として、その間を縫って、流れ落ちる水は、泡沫となって飛び散り、岩に砕ける音は、凄まじい響きを立てる。

轟々と響き渡る滝の音の外は、四辺寂として声なく、ただ、ほのかに、すばやいさまで、エイ鳥が、滝壺の上を、飛び廻るのが見えるだけ、林の木の動揺する音も聞えない。

仏の言葉、珠玉
あり、路無人漫漫
露国は茶を
喰る喰く、山吹や
言吉、潅沐は
ば長短二様
甘茶の潅沐、
を本当
少女
眉間
人は少年スキーの
名流の
おくれて

白蠟の大きを用いたのは座
敷をおく甚だ暗きを感じ
ぬ燈台まうへ、話しの後には大
きな大見樽は座敷さた、そんなにする
事のはは大事泥もう、猫足こた
ぬ油皿を用ゐ、灯、燈火(ともしび)
灰色淡灰とは遠近古就の微妙な
奴、成滅、自然居成、一切の
火輪は灼熱を放射する
の無量無辺の光景(灼々たるもの)
の天大、甚だ灼々たる天地のむくひあた、
ジョンオブアークは灼然として命令をした、
私、盤まはしは立ち上がる
ある際あの火を立輪(ともしび)

火焔を
鳥兄、日の中に鳥を
書く、鳥兄多多と言年一次の
要を終り、烏在に歸す(ねまるちゃん)
烏兄の采、息峠、烏中烏(ゆきね)を告
りて曰く「する所の子の足痕
彼は今の外自はなし、烏家の德里さん、
清住であけば烏詩
此れ丈け、要夫、
此れは事痕野兄
する黒髮の二と、烏髮は白人の事
の單にて烏踏の会
烏の此住を。棲息した棲も、烽火
口のろし、越前宇の烟眼には、眼之烟々、
お宿を君は意焼は
勿忘草、孝雪、

麗蓋寺跟情、面白の三手、場完
は私のすみたる気、去気時訊にと眼界
撮場たり、炬火、松炬、烟手どの明
多うり、炊爨、炊煙と、炊烟と
之翁は鋼柱を先火の上に掛を乗合
ゐせ定すべりしも中に座ろと花せーとる先、
先鋒は赤まの赤ひ送、先鋒屋
は相模原の弓也屋、松葉三定子、
炊爪七、憂国の烈士、烈女三夫人、
等異晩景、烈日は激し旺つり、烈
久々血、寒気烈々、秋冰烈々、
威嚴烈々、武勇烈々、烈祖、猛烈
雪烈、婦烈、寒烈、

急ぎ　とて　近く　熟田、宇佐、多迦
俄も　無く　いきなり　急に　燃はでふす、森ほの
焚ちやし（テヽニル）　筆大　枯ふは
小尼（ヂヽニル）　小尼と　一ま　煎

いとらしく姉こそ見えたれ涸轍ふな。

安心立命　朱命知らぬ女には、

つまかたや　みちなはこそ涸轍かな

ひよろ〳〵と　行方定めぬ七年、

いとらしく　花と見へる無蝶はな

安心立命　知らぬひとには、

よろこばし、　難儀もみえぬ

なが　つき　くの

安心ものは　世にはあらじ。

轉瞬暮春經七旬
同春之斯今當遠
雲埋二柴荊無流潦
且久閏而舒
憂心悄悄古鄉無女
煙霞療養經二七旬
柵暗花明今當遠
久閏而舒女不來
雲埋二柴荊無潦流一
昭和五年春於淸
漢詩溫習

杜夫る　　屋敷もせんせい

屋雲（ダイウン）　他人の手に渡る事（立退の事）

杜撰（ズサン）　著作に誤りの多きこと　信用出来ぬ、

杜憂（トユウ）　とりこし苦労、無用の心配。

杜夫人（トフジン）　杜氏の妻を尊敬していう言葉

杜林（トリン）　杜氏の子孫

杜松（ネズ）　杜氏の庭木

杜絶　交通の途絶

杜門　門を閉ざして客を謝絶すること

杜鵑（ホトトギス）　夏鳴く鳥、卯月鳥、子規、時鳥、杜宇、不如帰、

杜氏　杜家の主人

杜若（カキツバタ）　水辺に生ずる草花、

杜絶　交通の途絶

杜門　門を閉ざして客を謝絶すること

杜鵑（ホトトギス）　夏鳴く鳥、卯月鳥、子規、時鳥、杜宇、不如帰、

杜氏　杜家の主人

杜若（カキツバタ）　水辺に生ずる草花、

杜林（トリン）　杜氏の庭木

杜松（ネズ）　杜氏の庭木

杜絶　交通の途絶

杜門　門を閉ざして客を謝絶すること

杜鵑（ホトトギス）　夏鳴く鳥、卯月鳥、子規、時鳥、杜宇、不如帰、

杜氏　杜家の主人

杜若（カキツバタ）　水辺に生ずる草花、

杜林（トリン）　杜氏の庭木

杜松（ネズ）　杜氏の庭木

杜絶　交通の途絶

杜門　門を閉ざして客を謝絶すること

杜鵑（ホトトギス）　夏鳴く鳥、卯月鳥、子規、時鳥、杜宇、不如帰、

杜氏　杜家の主人

杜若（カキツバタ）　水辺に生ずる草花、

杜林（トリン）　杜氏の庭木

杜松（ネズ）　杜氏の庭木

杜絶　交通の途絶

杜門　門を閉ざして客を謝絶すること

杜鵑（ホトトギス）　夏鳴く鳥、卯月鳥、子規、時鳥、杜宇、不如帰、

杜氏　杜家の主人

杜若（カキツバタ）　水辺に生ずる草花、

杜林（トリン）　杜氏の庭木

杜松（ネズ）　杜氏の庭木

杜絶　交通の途絶

杜門　門を閉ざして客を謝絶すること

杜鵑（ホトトギス）　夏鳴く鳥、卯月鳥、子規、時鳥、杜宇、不如帰、

杜氏　杜家の主人

杜若（カキツバタ）　水辺に生ずる草花、

柘、やま桑　柘榴

折、柏ろ木、蓑備ふる。杉の柾

杉、サン　蠟　蠟の一種褐色のまゆを作る。

柾、ヘイ　柾屋。柾。屋柾

杓つる老人のつく杖、

柴、サイ　柴荊　柴やぶ原野

じゅうやう　重羽　体重ろ気積の厚い

基、もと　基は自己の建物

架空的　実現不可能の二とを夢想する事。

かんそら　空、クウ　架空の論、

校了　訂正ずみ、

校、キョウ　校正　くらべ合はせて正すこと。

校書、　舞妓の座敷を勤め遊客を慰むる女。

株守　しゅ　しゅまでも其慣例を守ること。

格、カク　格納庫　飛行機を入れる庫。

庫、コ　庫の見識　格式ばること。普通四三六。

料とが大、
内ゲ木
驚ケル と神ノ
ヲ木ヲ
三ツ三ツ、ま、
枯ラシ木
これの木
枡ダン、
ゆずは、
こち
木の汎
木の汎
上ッテ、
天ニ
ある寺も
鶏の鳴き声、
事は
ない
ほう、
傍ケし
寺の境内に
森
林、
林
林
林

桜、あをき、榊、大きなる
榊、たちき、 辛木、
梵ハン、ボン、佛教、寺院、
梵事、僧の事、
梵鐘 寺の鐘、
禁田 みもと、みかり、麓、
梨園 一ばい、滴、佛前のたき事、
りきゃうパウ 梨山洞 山寺者の学ぶ所、
普説、自ら喜ぶ事、
する博学者の云ふ事、
りゃうりゃうケンケン 梁土者 盗財の事、
梁山泊 盗賊の集まる所、
ケンケン 梁盗 盗賊
盗賊 盗人、
盗人のさぶす者、
盗人 盗賊のの事、
強盗 強悪の盗人、
強盗 盗賊の集まる事、
強盗 盗賊の集まる所、
強盗 盗賊。
強盗 盗賊。
強盗 盗賊。

桃より李は桃やすもも特に試験と指す。
桃の節句　天下桃李・春来やくに立つ人。
　　三月三日雛祭ル　「宜春」
桂男　人のるの好物
桂庵　桂ケイエン
校合に觸る　校合は相に同
梅セイ・棲に同じ、すむ、とまる。鶏の。
梅息セイソク　棲息に同じ
桔槔キッカウ、下座ゴザなるはおそろべし。
桁、すもものせと手かせ。
桐、くぬぎ。「庄左」桐ゾウ桐ゼン　春がさま
榜示　衆人を集め回す札。
棄戸サウコ・倉庫の戸　棄市・棄尸。
棄年　四十以上
棄門は沈門の轉音。
棄字の三本の木を橋下に柱を立たる）

村[illegible]　沈没の場合には[illegible]チョウセンとしふ

植民　殖民　植民地

棟梁　一家一国の鎮り棟、大工の頭、

棟梁　棟梁の如き、事任たふる材器、

棟　サ・すむずみの、

棟屋　集まるさま、生存する、

棟息　集まるの木に宿るさま、生存する、

棟遅　ゆっくりと去来の煩はしきさま、一ちゃう遅

棟宇　両せうと、百ぶのもの、とその数

棟梁　男むくどり、老屋の人の出家者嘲る時ゝ

棟梁　両せうと、百ぶのもの、とその数

相　実な杉、村国産の構ひし

梅　かまぼこ（錬）

森々　木の高く聳えるさま、盛なるさま

森然　木の立ち並んで茂けるさま、

森羅　木の立ち並んで陰なる森林中に隠れて

森林　生活する一静寂なる生活をすること、

苫屋（キカヤ）　栗田（キカタ）　荒海、　（キカイ）　（キカイ）　（キカイ）

桂 想 左ヲ(ヒ)ダリ 三ツ 人ヲ隔ル
構 陥 悪計ヲ(ヒ)メクラシ 人ヲ陥ル
桂散厚 桂(カツラ)ノ木ノ散厚キ 板厚キ 装(ヨソホ)ヒタル
木奏 木ノ名 ハヽ 楼閣屋
木棒茸 木ノ棒ノ茸 草木ノ茂ケル さま 緑樹棒茸(ハヤシ)リ
木棉 木ノ名 棉(ワタ)ノ実 四出
木棘 木ノ棘ハ 三棉ノ棘ノ実 四出
木責 木ノ名 木ノ責(カン)ノ実 オブ・アーム、
木村 木ノ名 木ノ村(ボツ)ノ実 オブ・アーム、
木エイエイ 木ノ名 エイエイ(ヤナギ)ノ実 枯木、枯木ノ枝ノ横ニ出タルヲ云フ
木エイエイ 木ノ名 エイエイ(ヤナギ)ノ実 蚕ノ喜ブ事ヲ云フ
木エイエイ 木ノ名 エイエイ(ヤナギ)ノ実 芽ノ勢ヒ さかんなるを云フ、芽繁茂事
杜木発芽 杜(モチ)木ハ花ヲ 木ノ発芽、かれ木ノ発芽
模擬 模倣 まねをなすこと、 模擬
模擬 模倣 まねをなすこと、 模擬
梳底 櫛ノ歯ノ事ヲ云フ 梳底 模擬芽村
(櫛ノ事ヲ梳子(ソシ)ト云フ) 梳子ノ事ヲ云フ
得た 観念 江江二

レンゲ　森鷗外　高家
棟（おうち）　ムラサキ　ばら、
海棠の花　　毛
菜の花　　菜の葉
菜の花　　菜の葉
菜の花　　菜の葉

帝道之文　私なまろ法の立除、
帝虎（三合）まこと実無板の事、
布衣之友　身分にかかはらず性情を以交る友
帝思　思ふ、思をきせる。
キせう
希求ケケ　こひねがひ求める、望み求ふ
ケケ
希有ケケ　めったにない、珍らしい
ケケ
帕はちまきー　三帝ほうきー、
ハンレン
巴人　田舎人
田舎しの。
檸檬ネイモン　枸橼ヒヨウタン　田舎もの。
檸檬ネイモン　枸橼ヒヨウタン　従に立たぬ者
檸檬ネイモン　枸橼ヒヨウタン　無能の人、自家の狭い田や畠。
自謙ヘリクダリ　自己に檸檬ネイモン枸橼ヒヨウタン程者。
檸檬ネイモン　檸檬ネイモン　ちんき　檸檬ネイモン　ちんきー　等の時蓋し田や。
檸檬ネイモン　檸檬ネイモン　檸檬ネイモン　

標札　一まとめにする名札、門にかける名札、ネーム・プレート。

標注　みは標注、ネーム・プレート。

標準　自分の主張を書いた看板。

標準法　日本ひはもち言法

標準時　スタンダード・タイム

標船　二階からうしゃのような自主権甲之人と、自主権甲之人のこと。

屋気極　ヘノメノン下女の死人

樋　かりさけ　童歌の詞

樋　むとげ　甚老人朝みそしる

樋老　一日成果。

樋老　松樹千年終自朽、槿花一日自成栄。

槻　ニシ　ぬぎ、槻つきやき、槻は、

槻　ニシ　国なり、槻もみ

槻　ニシ　槻ずみ。

様先 まの辺ちぬ 様は心の決断
機宜(きぎ) こまち
機宜の處置、まさ
機宜を決す。機転きてん
機宜(きぎ)
機転 気の向くまま。機転の敏い。
機変 臨機応変のこと
様子 様態。様子。
様子振、もも通をはぶき 責任者の様
そ秘密 重要の事柄を、
機械的 無意識に動くこと
様開成 自己の主張を発表するための
様式的世界観 世界の現象は凡て形式
様会均等。形益も
様直 飾り気
(さうけい)
想像(そうぞう) 経験のない事物を推
的な判断 の範囲や宇宙の生命という
存在しない 現、出来
(きそく)
規則(きそく) 推定 推測する
すなほ

巣窟（ラクド）
巣土（ラクド）は巣境（ラクきょう）

巣巣巣（ラクラクラク）と喜す、甚を楽（ラク）と喜す、

巣焼（ラクやき）手でこねた焼き陶器　聚楽（ラク）焼

巣天鵞絨（ラクテンガロン）

巣屋庭（ラクやにわ）

巣天主堂（ラクテンシュドー）

巣山（ラクザン）

現世（ラクセ）

お母（ラクおかあ）さん

人生（ラクセイ）

昔（ラクむかし）

楽（ラク）は安（ラク）の事、

横文字（ラクもじ）

横流（ラクながれ）

横行（ラクこう）闊歩（かっぽ）

横着（ラクちゃく）

横臥（ラクが）

横隔膜（ラクかくまく）

横領（ラクりょう）

横暴（ラクぼう）

横車（ラクくるま）

横槍（ラクやり）

横顔（ラクかお）

横町（ラクまち）

横道（ラクみち）

横目（ラクめ）

横手（ラクて）

横綱（ラクづな）

横断（ラクだん）

横着（ラクちゃく）

横領（ラクりょう）

横暴（ラクぼう）

横車（ラクくるま）

横槍（ラクやり）

横顔（ラクかお）

横町（ラクまち）

横道（ラクみち）

横目（ラクめ）

横手（ラクて）

横綱（ラクづな）

横断（ラクだん）

操（あやつ）り芝居（しばい）　歌舞伎（かぶき）　歌舞伎（かぶき）芝居（しばい）　歌舞伎（かぶき）作者（さくしゃ）　歌舞伎（かぶき）十八番（じゅうはちばん）　歌舞伎（かぶき）舞踊（ぶよう）　歌舞伎（かぶき）狂言（きょうげん）　歌舞伎（かぶき）座（ざ）　歌舞伎（かぶき）俳優（はいゆう）　歌舞伎（かぶき）役者（やくしゃ）　歌舞伎（かぶき）調（ちょう）　歌舞伎（かぶき）囃子（はやし）　歌舞伎（かぶき）劇（げき）　歌舞伎（かぶき）座（ざ）　歌舞伎（かぶき）芸（げい）　歌舞伎（かぶき）芸術（げいじゅつ）　歌舞伎（かぶき）芸術院（げいじゅついん）　歌舞伎（かぶき）芸術院賞（げいじゅついんしょう）　歌舞伎（かぶき）芸術院賞受賞者（げいじゅついんしょうじゅしょうしゃ）　歌舞伎（かぶき）芸術院賞受賞者（げいじゅついんしょうじゅしょうしゃ）名簿（めいぼ）　歌舞伎（かぶき）芸術院賞受賞者（げいじゅついんしょうじゅしょうしゃ）名簿（めいぼ）に載（の）せられる　歌舞伎（かぶき）芸術院賞受賞者（げいじゅついんしょうじゅしょうしゃ）名簿（めいぼ）に載（の）せられる所（ところ）　歌舞伎（かぶき）芸術院賞受賞者（げいじゅついんしょうじゅしょうしゃ）名簿（めいぼ）に載（の）せられる所（ところ）迄（まで）　歌舞伎（かぶき）芸術院賞受賞者（げいじゅついんしょうじゅしょうしゃ）名簿（めいぼ）に載（の）せられる所（ところ）迄（まで）漕（こ）ぎ着（つ）ける　歌舞伎（かぶき）芸術院賞受賞者（げいじゅついんしょうじゅしょうしゃ）名簿（めいぼ）に載（の）せられる所（ところ）迄（まで）漕（こ）ぎ着（つ）ける迄（まで）　歌舞伎（かぶき）芸術院賞受賞者（げいじゅついんしょうじゅしょうしゃ）名簿（めいぼ）に載（の）せられる所（ところ）迄（まで）漕（こ）ぎ着（つ）ける迄（まで）に

ソンソセッソウ
檀那折衝
ヤヤ文上の話判にひけて西也
ふす国成と知
ケラ
桟も
ケラ
ず雪根かんじき、
ヒヤルヤ
撫ぎなりみも様、
樏、樏かぶき、
素々
敢
せむし、言ひ行きしもの前、
寿庭坊
柚木屋の
檀主宣かの
挿へ自身
ケンケン
東り帰る
ケンケン
裁判官の後ろ
ケンケン
検事
ケンケン
検
ケンケン
敵
檀那
旦那、
檀主
エンエン
檐
エンエン
軒先の小
檐
エンエン
鍬
エンエン
天
檀主宣かの
檐
エンエン
檐
エンエン
ばん
檀主
ケンケン
檀那
まつせに、
檀主
ケンケン
檀那
菜
きはだ
童、
檀
ケンケン
檀那
相撲
監
ケンケン
言
ケンケン
ケラ
ケラ
ケラ

禾光 庭壁 で ご 信
オン ようう ろう ろう
音土 訓 憫 音声の ほかかかなる 訓良
心 ろう ろう ろう
禾 表 協 同 ト ホ ア ハ ウ 力をあわせる
吐 唷 梶 髮 食事中 休憩中 詩吟中 長髪を 一つに 束ねる
賢者を 優待する意。
握る 左を
欠 漢 なげく。 元 おなげく。 ほむ。
歎 美 心 なげく ほめたたえる。 叙
歎息 メン ソク なげく ため息をつく。 サン 称 賛歎
歎賞 シャウ なげき 感心する。
歎称 ショウ 歎美 同じ
歎声 セイ なげき うめき ある声。
歎 声を発した。 なげき うめき ある声。
悲歎、悲歎、感歎、嘆歎、讃歎、
歎願書 なげき 願う 書面。
歎願 ガン なげき 願う。
歎 ヨウ 歎願 希望 すること。
歎心 シン うれしい 感心の声。

くぬぎ
樫レキ、ひのはをけ、高樫。
洋ボケッとばえ、見落えを復ひまる形容。
櫻 櫻科 櫻狩
櫻雲さくらの花の降山開したのを雲に見立てい
櫻門 櫻功なる家庭
櫻化ケ 俳句季を表わすために仮名となる現象
櫻木 櫻現前後
高官の人が人民をケンカする力。
櫻化ケの妻、 櫻衛 ひとりもの
櫻木 櫻ゴケ 木偶 人形 会社株式をうらなう術
櫻詰 櫻ゴケ 術数 人を欺くこと
園藥 菜ヌラン すもが庭園する。
車 庭園
欠伸 ケンシン、あくび、せのび。
キンカン 金柑 草木のつキソーテ
欠伸 ケンシン、あくび、せのび。
きんきら 金柑の手
欠伸 ケンシン、あくび、せのび。
欠伸 ケンシン、あくび、せのび。
欠伸 ケンシン、あくび、せのび。

武具　武器、まろとものおと

武庫　武具を納める庫。博学多識の者をたとえる。

武者　軍事のことにあたる人。

武者振　武力の持ち主をさす。

武陵桃源　仙境の名。現俗を別世界。

武骨　風雅をつけた姿。つたない。

武断　武力で押へつけること。

武張る　いかめしい。

歩行　ゆかむ　ゆかな　ゆく　ゆけ　正ス

歩行　ありく　ありか　ありき　ありく　ありけ　ありこ　正ス

歩行　あゆむ　あゆま　あゆみ　あゆむ　あゆめ　あゆめ　正ス

歩行　あるく　あるか　あるき　あるく　あるけ　あるけ　正ス

歩行　あゆみ　あゆみ　あゆみ　あゆむ　あゆめ　あゆめ　正ス

歩行　あるき　あるき

大声を出して喜ぶ。

心持のよくもなる。

喜びもするくるう。

愛情に引きつけられる。

愛情に引きつけられる。

愛情に引きつけられる

殊 珍 殄 殉 殊 殊 殊

帰心 キシン 在外帰国の心。
帰臥 キガ 帰って臥す。
帰休 キキュウ 故郷に帰って父母の喪を休む。
帰耕 キコウ 帰って耕す。
帰国 キコク 帰って国を治める。
帰順 キジュン 帰順すること。
帰省 キセイ 故郷に帰って父母の喪を休む。
帰葬 キソウ 帰って葬る。
帰宅 キタク 帰って宅を構える。
帰着 キチャク 帰って着く。
帰朝 キチョウ 外国から帰朝すること。
帰途 キト 帰る途中。
帰農 キノウ 帰って農業をする。
帰服 キフク 帰順すること。
帰郷 キョウ 帰って郷里に住む。
帰京 キョウ 帰って京師に住む。
帰来 キライ 帰って来る。
帰路 キロ 帰る道。
帰路 キロ 帰る途中。
帰還 キカン 帰って還る。
帰還 キカン 帰って還る。
帰還 キカン 帰って還る

殴丘 河きしおぶおこって泣きつく子地
殴華 わんぱろう、てんぱろう
殴亜 ひとなる亜、
殴脈 きわめて脈やか、御巨殴脈
殴鷺 他の失敗をなんとの成功とする。
殴下 とのしんがり。殿少、まとはる、
殴軍 しんがり軍。
殴軍 こすすてる。こは殴されすつる。
殴分 分ハン
殴着痛を殴 ほめそやすとそしる。北辛すつ
殴打倒 とこ微笑む。
殴打倒 撲殴確認 黄疸をましい
殴女 女サツ
殴打倒 人を殴みこと得る百はしめる
井ブム、ちこし、なのれ、ハクのつう
井望之種、望もとなすまま。
井望之種、不和二井望之種
井望之種、世有井望之種

殷昌　殷さん　殷々たる　殷々たるまま　殷昌はんぼろ

殷昌はん　殷昌　殷々たる　殷々たるまま　殷昌はんぼろ

殷昌　殷さん　殷々たる　殷々たるまま　殷昌はんぼろ

殷昌はん　殷昌　殷々たる　殷々たるまま　殷昌はんぼろ

殷昌　殷さん　殷々たる　殷々たるまま　殷昌はんぼろ

殷昌はん　殷昌　殷々たる　殷々たるまま　殷昌はんぼろ

殷昌　殷さん　殷々たる　殷々たるまま　殷昌はんぼろ

殷昌はん　殷昌　殷々たる　殷々たるまま　殷昌はんぼろ

毛 毛詩 大雅 烝民之詩

毛拳 毛のえ程の小虫が飛ぶ。

老(ムシル)する。引つかぶる。引つかぶる。

気(キ) 其存在を知れどもすべからざるもの。気体。推察名詞。

気(キ)ノヨリ 気力。こん気を定。気文(キブン)一般に動き心。

気(キ)ツイ 気迷 はなすると云ふ事。動く状態。気文のえは。

気品。品位。気風。気性。きだて。気柄(ニンガラ)

気(キ)息 気息。ため呼吸。気息奄奄(やっといきすうさま)

気(キ)附 気附の悪い 相場 十五日。

気候 一年を二十四気、七十二候にわつ。

気海 大空の気、大気、晴の不一ます信用。

気(キ)毒 毒を当てる。毒は云ふまでもなく不幸なことの不幸の時。

気(キ)分 気分 気分 気

母堂（ぼどう）、北堂（ほくどう）、令母（れいぼ）、慈母（じぼ）、母君（ははぎみ）、母上（ははうえ）、母たるもの、母たるべき道（みち）、母となる道（みち）、妻（つま）、愛妻（あいさい）、妻室（さいしつ）、人の妻たる道（みち）、妻たるべき道（みち）、妻（つま）、妻君（さいくん）、妻女（さいじょ）、妻子（さいし）、妻帯（さいたい）、妻君（さいくん）、妻女（さいじょ）、妻子（さいし）、妻帯（さいたい）、妻（つま

永字會　永暮れ方

永萍　永年　永上がる　永遠の別れ

永辺　永遠　永住の地

永訣　永代橋

永法のとぎ　永雛の一声

永眠　永代供養

永住の地　永遠の別れ

永代橋　永遠の別れ

永山　永遠の別れ

永訣の朝　永遠の別れ

永遠の別れ　永遠の別れ

永遠の別れ　永遠の別れ

永遠の別れ

年（ネン）、まわん、頬（ほほ）
用（もち）
用は正しき言（ことば）をそなへつつしみ深く親（おや）
私の別なく親しみあふ。（論語）
君子用（もち）有比、小人比（ひ）亡用（もち）。
建築土比（ヒ）倭（ヒトリ）
なぶ、なぶべるもの比倭、（ヒトリ）仲間
地つきの顔（かお）
境（さかひ）
隣（となり）と云ふ近所、教（をしへ）鵜鴨悩比（ヒ）隣（となり）
翼（つばさ）、夫婦の睦（むつま）じきに喩（たと）ふ。
塚（つか）　情死せる男女の墓。
連（つら）ねる、連（つら）ねて、一つづく、
連理（れんり）の枝（えだ）　左（ひだり）と右（みぎ）の木（き）の枝（えだ）が一つに連（つら）なり合（あ）ひたるを言（いふ）。
比翼（ひよく）連理（れんり）　比翼は二羽（わ）共（とも）に目（め）一つ翼（つばさ）一つづつ合（あ）ひてゐる鳥（とり）。連理は両木（りやうぼく）の幹（みき）が一つに連（つら）なりたるを言（いふ）。
在矢顧（ヒ）化（ケ）比翼（ヒヨク）連理（レンリ）枝（エダ）　在地顧客（ヒ）連理（レンリ）枝（エダ）
比（ヒ）　田（タ）比（ヒ）　みな匹（ヒキ）　たすく、
比（ヒ）　翼（ヨク）　助（たすけ）る人（ヒト）に利（イ）益（エキ）ある。
助（たすけ）力（ちから）する、輔（たすけ）る。

江、こうわ 揚る江、元
カンエン 河の中流、江の東、揚子江の事。
カエル 河に映る月の影、江江河の江。
エ月 河に映る月の影、江江河の江。
カエン 村 川に沿える村、江東河の辺。
カエル 江畔、河のほとり。江畔佳人初見月。
江 船 揚子江を上下する船
江湖 三江五湖の眺、一世の中、世五。
汗 汗事十二ぶか トもがう お前言達、なんぢ。
汗 汗事なんぢ 代、太の字。
汗 汗 はたらくことを汗、皆汗。
汗 汗 はたらく事に汗をかかせる者、職もの勘方。
汗 汗 牛 元棟牛ハ汗てのばかの多

書生気質、娘気質、康生気質、
気が概ね
気味のしかりしおてなき様の躾、
気に入らざる
気に入らざる点を直す、指頭の躾、
気が多く
庵ける
携書文章上の躾、
舞踏上の時間を主とする痕跡、
水と空、
水天髣髴、水と空とさしたり、
水天髣髴
可笑しき
一性質の反対多き一個の体の事ごとに喰ひ違ふ、
水と月、
水と月、胸にまとまる点所、話す近く見み合ふ、
水と月
水と花、
花、蒔、秋いと
水と月
水と月
水と月

決起 きをはしをたつこと、決断とも書く。
決行 いを遂げること、決断して行うこと。
決潰 潮のために堤がきれること。
決闘 三者と言えばの最、勝負をきめるはの
決勝 決勝戦 決勝点 決勝線 決勝打
決心 きっぱりきめること。成敗を於決断
決然 決然 遺恨ヲ決する一の形ずき事ー右、
決定 多数の人の意見がまとまりをきめること。
決戦 勝敗のきめる地点、
決死 決死の士 決死隊 決死の覚悟
決算 一年間の収入支出をしめくくり計算すること。
決裁 自決 即決、解決、
決議 決議文 決議案 決議書
決勝点 決勝戦 決勝線 決勝打
決心 決心 決心
決定 決定 決定
決戦 決戦 決戦
決死 決死 決死
決算 決算 決算
決裁 決裁 決裁
決議 決議 決議
決勝点 決勝戦 決勝線 決勝打
決心 決心 決心
決定 決定 決定
決戦 決戦 決戦
決死 決死 決死
決算 決算 決算
決裁 決裁 決裁
決議 決議 決議

永訣　永訣の朝　エイケツ　エイケツ

永久中主　エイキュウチュウシュ

辻　つゆ　計　彩　詠　訂　みぎは、キミ　訂　訣　訂　訣　訣　訣

沈倦　雲霞、海濱、
沈滞　する、滞る、澱む、淀む、澱、淀、
沈酔　ひとく酒に酔ふこと、
沈欝　テンウツ、気のめいること、気ふさぎ、
感化窮乏　気のめいること、
沈欝　テンウツ、気のめいること、気ふさぎ、
沈美　陰鬱は陰気にとぢこめられた美、
沈美　陰鬱は陰気にとぢこめられた美、
沈む　沈みます、
沈む　沈みます、
美人　美人が水底にみする様な美、
沈む　沈みます、
沈む　沈みます、
沈む　沈みます

ヲメイテ
ケテ先ニ、不安ヲ
活　　ヨウナ
ヨウニモ
ヨウニモ
ヨウニモ

心ノ一丈、一みこと、
丑ノ刻ニ
寅ノ
寅ノ気ノ花あいたら
花ニ開一そふ、
ことは
日ノ
一ノ日ノ
ノ日ノ
ノ日ノ

没ッこと
没ッ書
没ッ居
没ッ頭
没ッ多時ッ

耳鼻咽喉科
招待されおにすること。
人の落ちたること。 専属。 永没
特等 不幸 夢 中止 すること。
理論 力の足らざること。 わすれやすい 漢

没ッ文法 ボッカラ かがはる
没ッ関係 ボッカラ 九 ボッカラ 九 ボッ
没ッ 人間 なみの 智識 を持つため
没ッ 知 趣味 ないこと。 無芸 殺風景。
没ッ 趣味 ないこと。 無芸 殺風景。
没ッ 趣味 ないこと。 乾燥 無味なこと。

没収 没収 こらしめ とめ やすめ さま、
不没収 没収 官吏 厳 厳重。
官材 吏 満 厳之 字 厳一

天田 おし肥えた 地 ぢ 九 おのれ 豊年 豊作。
天 土 、 沃 野 、 沃 地 ぢ の 豊 ぢ 九 おのれ
天空 地 ぢ 鏡 かがみ 来 ること。
神 虚 空 旭日 冲天 の 勢
天空 通ル 昇ること。
神 虚 空虚なこと。

法灌、なほ、この章の末尾のごとく、法華頂重要、
平地に法華を開き
ハリキリサセ 教示不審、妄念古井水、 法華
ハリキリ 法華某ほうかんさう、野某の種、
法華最ハリミツ 勝善ハリ 生死のさかひを免れること、甘い事ぢや、
ハリ 法人 法華、此派、
ハリ 人 二は教律の事、是法寺を開人と同様に
ハリ 権利義務のため、主体と見た故、
ハリ 法人 権式房主のごとき一定の主体、
ホウヲ 法王ホウス、法王冠、真実には一宗の長、
ホウヲ 法王 仏教の頭、
ホウヲ 法王ホウス、法王冠、真実には一宗の長、
ホウヲ ホウヲ ホウヲ

ヨコセヤト
神積主　河海ほとの岸に昼も夜も
オキツカミ　土砂の積もりて
神津東　神左にあるの事、
ツモリツモリ　凡にさらし、雨ふれること、
樟凡ノ沐雨
沐雨、モリツ、
モリコロコロナ、
沐猴而冠　又　苦みて思ひて勤むること、
隼生が頭に冠を旦那にみする如き楚人の冠をみるは先ず猿が冠を着るに似たりと嘲りたるなり
ガラに似合ぬ右なりことをするものをすかに申ふ。
帝笑す　盛なる事、雨のきらぬ降る
ま、雨のきらぬ降る
するさま。感動

ハイヌク
帥準　章の発生たる形也
ヒロシ
王訥　庸と静かなるさま、
王訥　雁のかきつばたなるさま、
訥トンとにぶし。ものまた定かぬ
訥トンとにぶし。ものまた定かぬ
猾の指示は渾沌たるの混沌たる

法律哲学ヨリ最モ其事ヲ
分リヤスク説キタル書
法律現象ヲ法律範囲ニ属スル
法律範疇ヲ以テ
説明シタルモノ

注意ヲ怠ルコト
注意ヲ怠ルコト
注意ヲ怠ルコト

注意ノ涙、注ヲ不
注ヲ別ル
注ヲ別ル
涙ヲ持チテ注ス

カンン

河の底の真中・中流
河の心もと
河の身、
河の産
河の至
河の底のこと
ひどくでこん高眼・河泊・河の神、
河口の底たる
水おす河
産まれつと
鉄産の言葉
河の本底と
河の本底
ふくの一種、
河豚カンカン、
言葉カッパ
河の獄
河の至高

カンカン
河の中三
中三年
する王、
秋
波
なみ、
波
海
波底

カンカンまわり
河の映中三
中三年
する王、
秋
波
なみ、
波
海
波底

戒厳の都市
河泊の神、
河の神
河口まで
河の底のまでこと云ふ、
河口まで
河口まで
河口まで

清晴駒　きっ退　摂氏0度
退却　はは丈　すまん
阻止　さまたげる　阻害　阻喪　気力を失うこと　気阻喪
すまたげる　阻害　阻喪　気力を失うこと　気阻喪
阻止　さ

今ヤン法院 朝鮮居住民衆事
今ヤ法座 新宿所にあつまる諸宗派の学匠、
今マヽ法綱 佛法の說教をきくべく
法ヲ法燈 佛式でする人を集めること、
幢 法律つまり法綱をくづし
法ヲ法律 佛法世界の迷信を打破
今ヲ法律 撤廃をすることを
今ヲ法律 撤廃を定めることに
法ヲ元因 なる原因を去る

志ヲ志ヲ 唯一心を明かにした佛教の系統、
玄ヲ相宗 唯一心を明かにした佛教の生相を說き三乘
志ヲ法華宗 法華經、眞實を主とした宗旨建設、
法ヲ法華 法華經、眞實を主とした宗旨建設、
法ヲ親王 出家の後數年宣下宮の如き、
法ヲ律行 私法上有効なる法律を生ぜん
法ヲ律行 とする行爲

（ママ）

泰山
泰山ノ
泰山ノ
泰山ノ

泥酔　泥酔者　泥酔婦人　泥酔の男　泥酔の女
泥酔者の通行　泥酔者の群　泥酔者の歌
泥酔者の行列　泥酔者の行進　泥酔者の行方
泥酔者の歌　泥酔者の踊　泥酔者の踊り
泥酔者の踊り子　泥酔者の踊り手
泥酔者の踊り場　泥酔者の踊り場所
泥酔者の踊り場の雰囲気　泥酔者の踊り場の光景
泥酔者の踊り場の風景　泥酔者の踊り場の様子
泥酔者の踊り場の模様　泥酔者の踊り場の有様
泥酔者の踊り場の状態　泥酔者の踊り場の状況
泥酔者の踊り場の情景　泥酔者の踊り場の場面
泥酔者の踊り場の場景　泥酔者の踊り場の場所
泥酔者の踊り場の場合　泥酔者の踊り場の場
泥酔者の踊り場の場面　泥酔者の踊り場の場景
泥酔者の踊り場の場所　泥酔者の踊り場の場合
泥酔者の踊り場の場

津、つ、渡しは、きしの
江ジン
津人　泊しる、泊しもり、
江ゲン　　趣味津浦、
津云　たま或は手引なる言まお
江ガン
津岸　わたは、泊船堪ら、津歌、
江ジン　十のたつぷりなさま、うま味、
津事、趣はなとの寺それさまに用中、
江事　つぎ、津夜、津夜
江ゲン　わたしはと格、津
津梁　びき、孔陸て往返する義より、
ビキ　津梁は津岸に掛し橋也。
　津奉西主南　津梁
　ジン　言なの　ずるの橋もお
　津筏　津亟は津岸に掛し橋也。
　津々浦々　浦々迄ゆきわたる
　ヤまのうら　津々浦々の言なる
　津あらゆる、我で西洋の言なる
　アラユル　みる也、帯紋綿
　津々　はてしなく、雁
　アヤ　ありさま、水の盛
　津癖ヘキ　癖のものを好
　流水癖　流水癖の譬にも、孔雀の尾を和漢洗濯に用ゆ。

レイ　涕（なき）、涙（なみだ）は凡（すべて）の声、音聲（おんじょう）の盛（さかん）に過（すぎ）るさまをいう人（ひと）

奠（てん）、吉業（きちぎょう）の席（せき）、供人（くにん）

私（わたくし）なき凡（すべて）

軽（かる）さま、清（きよ）らかさま、すがすがしさま。

自（みずか）ら、涙（なみだ）、さかのぼる、泜（ひ）、ほろぶ。

ほろぶるは亡（ほろ）ぶるなり。一家泜（ほろ）ぶ。

ほろび失（う）せる、亡（ほろ）ぶること。

喜（よろこ）び事（ごと）をなくする。

泗（し）のほとりの義（ぎ）、孔子（こうし）の道（みち）を教（おし）へ給（たま）ひしなり。

特（とく）に泗上（しじょう）微言（びげん）朝廷（ちょうてい）の政（まつりごと）

泗（し）は川（かわ）の名（な）

泗上（しじょう）

北（きた）の野（の）の盛（さかん）なる、洋洋（ようよう）たる、洋（よう）

洋（よう）

洋（よう）

流浪漸再経三歳、髪の毛やたんくたれ、
流連 ろうにょ つづけた事
流連荒亡 遊興のために家業を怠ること
流涕 感情のすぐなみだ
流説、流言、流伝、流布、流行、流転、流離、流謫、流罪、流刑
流暢 言葉のすらすらとでること
流麗、いう 文章の美しいこと
流眄 横目でみること
流産 自然のまま
流鏑馬 やぶさめ
流鏑馬やぶさめ 走る馬の上から的を射る競技
流星光底長逝 死ぬことを流星の光の下に長逝に例えた
流水 止まることなく流れる水、人生のうつり変り婦女
流用、治佛、治国、政治

洞穴（トウケツ）ほどちな、いわや、洞窟、
見ぬく 見通す 洞察（ドウサツ）
洞房（ドウボウ）閨すたる房、婦人の寝室、
洞開（ドウカイ）開放（カイホウ）こと、
洞察（ドウサツ）はるきはめること、
洞見（ドウケン）見ぬき悟る見とほす、
洞達（ドウタツ）なく疎々と通ささま、
洞庭湖（ドウテイコ）支那南方の一お湖名、
洞房花燭（ドウボウカショク）婦人の寝室に燈火のあかくとぼること、結婚の夜をいふ、
洞房華燭（ドウボウカショク）と同じ、

支那先（シナサキ）の都（ミヤコ）の先、
京都（キョウト）の上（カミ）京（キョウ）は京都の中、と斗、
洞院（トウイン）通（トオリ）は京都の通り中、洞院の中、
洞院（トウイン）の人（ヒト）たち、は京都の先輩（センパイ）、
洞院（トウイン）通（トオリ）の議（ギ）、京都の通り中の議、
洞院（トウイン）通（トオリ）を作（ツク）りたる時（トキ）、
洞院（トウイン）通（トオリ）を造（ツク）ること、
洞院（トウイン）通（トオリ）、洞院の通り、
洞院（トウイン）通（トオリ）を造（ツク）りたる時（トキ）、
洞院（トウイン）通（トオリ）を造（ツク）ることに付（ツ）いて、
著書（チョショ）の序（ジョ）に行（イ）ひたる洞院（トウイン）通（トオリ）造（ツク）りの事（コト）、
洞院（トウイン）通（トオリ）造（ツク）りの事（コト）、
洞院（トウイン）通（トオリ）造（ツク）りの事（コト）に付（ツ）いて

洗ふ　洗濯物
詢ケン　ちょうく（ふれ、
詢ジュン　まこと、まことに
流カツ　ながれ、やはらぐ
洋ヨウ　ひろい、大海、
洋のごとくひろい事物に精通していること、博識
見聞　みること
睦み　むつまじいこと
洞　ほら、みぞ、ほら穴、洞窟
洞ドウ　ほらあな、
洞注、あな底ふかくそそぎこむ
洞堤　あな底ふかくそそぎこむ堤
洞堤すきとおるごとく
洞堤川の洞堤　是れ亦た

洙流　洙は河名　泗と合流する川の名　山東省にある、
洙泗の学　洙泗の間で孔子が道を説かれたのでこの名がある、
洙泗の学とは孔子の儒学のこと、
洙泗の学を修める、
洙泗の学を修めた人、
洙泗の学を修めた人の言葉、
洙泗の学を修めた人の言葉を聞く、
洙泗の学を修めた人の言葉を聞いて、
洙泗の学を修めた人の言葉を聞いて、
洙泗の学を修めた人の言葉を聞いて

うつかん
佐民　塔七頁、松ことまる男子一冊と
告白　多唱
　　のみ読、西読、洗濯生活元気
　　ふつう
　　ふつう
　　歌、人生とかいつかの
　　歌、人生とかいつかの
　　歌、人生とかいつかの

海、うみ、わたつみ、天地、海宝、天海、海
海天　海と天と、海上の空、雲霧海天去。
海内　天下。国内。海内静謐（セイヒツ）。世の中の静まること。
海月　海上の月。橡葉新海月（トチノハアラシ）。海日（カイジツ）生。
海気　海上の気。
海光　海上の光景。
海味　海でとれる食料、魚介海藻類一切。
海辺　海と陸とのさかいをなす辺り。
海上　海と陸とのさかいをなす辺り。
海原　広い海の上、おおうみ。
海流　南流の二と、赤道と極との間を一定の方向に流れる潮。
海潮　二つの大陸地にはさまれた海。海の気。
海風　海の空気。
海産　海の産するもの。
海獣　海にすむ獣。海豚（イルカ）、海豹（アザラシ）、海狸（ラッコ）。
海亀　海にすむ亀。
海鼠　海にすむ動物。
海鼠腸　海鼠の腸を塩辛にしたもの。
海鼠壁　海鼠の形をした瓦を用いた壁。
海鼠形　海鼠の形。
海鼠腹　海鼠の形をした腹。
海鼠眼　海鼠の形をした眼。
海鼠瓶　海鼠の形をした瓶。
海鼠釉　海鼠の形をした釉。
海鼠形　海鼠の形。
海鼠腹　海鼠の形をした腹。
海鼠眼　海鼠の形をした眼。
海鼠瓶　海鼠の形をした瓶。
海鼠釉　海鼠の形をした釉。

洪志（ニョオン）大悲菩薩（ダイヒボサツ）
洪基（ニョオンキ）大悲菩薩（ダイヒボサツ）
洪導（ニョオンドウ）大悲菩薩（ダイヒボサツ）
洪業（ニョオンギョウ）大悲菩薩（ダイヒボサツ）
洪深（ニョオンシン）大悲菩薩（ダイヒボサツ）
洪辯（ニョオンベン）大悲菩薩（ダイヒボサツ）

洪志大悲菩薩は、清思尚（セイシショウ）
大きな志、大きな事業を、
思い尚ぶ菩薩。
洪基大悲菩薩は、基尚（キショウ）
大きな事業、基を尚ぶ菩薩。
洪導大悲菩薩は、導尚（ドウショウ）
人の面倒をよくみてあげる菩薩。
洪業大悲菩薩は、業尚（ギョウショウ）
大きな事業、基を尚ぶ菩薩。
洪深大悲菩薩は、深尚（シンショウ）
心がふかくて、とても思いやりのある菩薩。
洪辯大悲菩薩は、辯尚（ベンショウ）
法をすすめることを、上手にする菩薩。

洪辯大悲菩薩（ダイヒボサツ）
洪辯（ニョオンベン）すすめる、はなす、弁ずる、
説く、
拿尊者（ダソンジャ）
ダソンジャ、尊者さま、
海龍王（ヘリョンワン）
ヘリョンワン、龍王さま、
列風（ヨルプン）
ヨルプン、烈風、
向海（ヒャンヘ）
ヒャンヘ、向かう、
海潮音（ヘジョウム）
ヘジョウム、海潮音、
海龍王（ヘリョンワン）
ヘリョンワン、海龍王さま、
海潮音（ヘジョウム）
ヘジョウム、海潮音、
觀世音（カンセオン）
カンセオン、観世音、
普門（ポムン）
ポムン、普門、
圓通（ウォントン）
ウォントン、円通、
大士（テサ）
テサ、大士、
觀自在（カンジャジェ）
カンジャジェ、観自在、
大悲（テビ）
テビ、大悲、
大願（テウォン）
テウォン、大願、
大勇（テヨン）
テヨン、大勇、
無畏（ムイ）
ムイ、無畏、
施安樂（シアンラク）
シアンラク、安楽を施す、
施無畏（シムイ）
シムイ、無畏を施す、
施法樂（シポプラク）
シポプラク、法楽を施す、
救苦（クゴ）
クゴ、苦を救う、
救難（クナン）
クナン、難を救う、
救厄（クヨク）
クヨク、厄を救う、
滅罪（メルチェ）
メルチェ、罪を滅ぼす、
滅障（メルチャン）
メルチャン、障を滅ぼす、
滅業（メルオプ）
メルオプ、業を滅ぼす、
滅苦（メルゴ）
メルゴ、苦を滅ぼす、
滅難（メルナン）
メルナン、難を滅ぼす、
滅厄（メルヨク）
メルヨク、厄を滅ぼす、
滅煩惱（メルポンノ）
メルポンノ、煩悩を滅ぼす、
滅貪（メルタム）
メルタム、貪を滅ぼす、
滅瞋（メルチン）
メルチン、瞋を滅ぼす、
滅癡（メルチ）
メルチ、癡を滅ぼす、
滅業障（メルオプチャン）
メルオプチャン、業障を滅ぼす、
滅三災（メルサムジェ）
メルサムジェ、三災を滅ぼす、
滅三毒（メルサムドク）
メルサムドク、三毒を滅ぼす、
滅三障（メルサムチャン）
メルサムチャン、三障を滅ぼす、
滅三苦（メルサムゴ）
メルサムゴ、三苦を滅ぼす、
滅三業（メルサムオプ）
メルサムオプ、三業を滅ぼす、
滅三惡（メルサマク）
メルサマク、三悪を滅ぼす、
滅三惡道（メルサマクト）
メルサマクト、三悪道を滅ぼす、
滅三途（メルサムト）
メルサムト、三途を滅ぼす、
滅三界（メルサムゲ）
メルサムゲ、三界を滅ぼす、
滅三有（メルサムユ）
メルサムユ、三有を滅ぼす、
滅三垢（メルサムグ）
メルサムグ、三垢を滅ぼす、
滅三熱（メルサミョル）
メルサミョル、三熱を滅ぼす、
滅三火（メルサムファ）
メルサムファ、三火を滅ぼす、
滅三昧（メルサメ）
メルサメ、三昧を滅ぼす、
滅三界火（メルサムゲファ）
メルサムゲファ、三界火を滅ぼす、
滅三界苦（メルサムゲゴ）
メルサムゲゴ、三界苦を滅ぼす、
滅三界業（メルサムゲオプ）
メルサムゲオプ、三界業を滅ぼす、
滅三界惡（メルサムゲアク）
メルサムゲアク、三界悪を滅ぼす、
滅三界惡道（メルサムゲアクト）
メルサムゲアクト、三界悪道を滅ぼす、
滅三界途（メルサムゲト）
メルサムゲト、三界途を滅ぼす、
滅三界有（メルサムゲユ）
メルサムゲユ、三界有を滅ぼす、
滅三界垢（メルサムゲグ）
メルサムゲグ、三界垢を滅ぼす、
滅三界熱（メルサムゲヨル）
メルサムゲヨル、三界熱を滅ぼす、
滅三界火（メルサムゲファ）
メルサムゲファ、三界火を滅ぼす、
滅三界昧（メルサムゲメ）
メルサムゲメ、三界昧を滅ぼす、
滅三界苦（メルサムゲゴ）
メルサムゲゴ、三界苦を滅ぼす、
滅三界業（メルサムゲオプ）
メルサムゲオプ、三界業を滅ぼす、
滅三界惡（メルサムゲアク）
メルサムゲアク、三界悪を滅ぼす、
滅三界惡道（メルサムゲアクト）
メルサムゲアクト、三界悪道を滅ぼす、
滅三界途（メルサムゲト）
メルサムゲト、三界途を滅ぼす、
滅三界有（メルサムゲユ）
メルサムゲユ、三界有を滅ぼす、
滅三界垢（メルサムゲグ）
メルサムゲグ、三界垢を滅ぼす、
滅三界熱（メルサムゲヨル）
メルサムゲヨル、三界熱を滅ぼす、
滅三界火（メルサムゲファ）
メルサムゲファ、三界火を滅ぼす、
滅三界昧（メルサムゲメ）
メルサムゲメ、三界昧を滅ぼす、

悔化
なき事をよくみたして信得すること
ゆうべ日
日をくらす、ひまをつぶす
有ちまち
有ちまち
有ちまち

海ヲ圍ム　海の岸、凡（すべて）
村ノ海　海上の九、車（くるま）
海ノ景色　海ノ景色
海ニ　海ニ
軟（やわらか）ナ　カイナン
芝原ノ青草　芝原の青草
村ノ屋根　村の屋根
海ノ景色　海の景色
荒海ノ海ノ　荒海の海、
浪人ラシイ　浪人らしい、
浪死　浪死
犬ノ　犬の
浪々　浪々
浪ノ元（もと）ヲ去（さ）ル　浪の元を去る
浪漫主義　浪漫主義
浪漫主義者ノ自己　浪漫主義者の自己
浪漫主義者ハ常ニ自己ヲ中心トシテ思想ス　浪漫主義者は常に自己を中心として思想す
ソノ上ノ一凡　その上の一凡
浪人　浪人
浪士　浪士
浪費　浪費
浪ダガ　浪だが
浪人、漂泊ノ人、　浪人、漂泊の人、
浪ヤスク、　浪やすく、
車安国　車安国
日本国ノ古格、　日本国の古格、
浦曲　浦曲
浦ノ折曲ト云ル　浦の折曲と云る

煽煙　次ニ煙草（如何ニ煽）
煽煙セラレ、ソノ煙ヲ吸ヒ込ムコト、
後レン、サラフ、後
先ヅ我ノ厳ナル父ノ前ニ於テ、煙草ヲ喫スルコト、
我妻ノ面前ニ於テ煙草ヲ喫スルコト、
我妻ノ面前ニ於テ煙草ヲ喫スルコト、
延ビ、延ビ（二年ゼンキ延ビ）
延ビ（二年ゼンキ延ビ）
延ビ（二年ゼンキ延ビ）

手足
起き
相撲の下座
なること、
向こうこと、
静かなこと、
雲
華
うぬぼれ
雲にほど遠き雲、
ること、不真面目、不真実、
大きいこと、
寺
寺
寺

清朝 じんのよい清朝
清らか 清朝
清い 清朝
清らか 清朝
清い 清朝
清らか 清朝
清い

院ろん、まふ、すすむ、すすむ
境勇 勝の帝を洗い清め
境濱ろデキ・況た
岸ろん、包たす・岸ろん
端要・あめ降の雲、
海、と、みち、
夜セン、あまり
辰
きまし・そぎまし
青と青く、
清野狂、
青しすんで海時
清水フリッ
清野秀朗
眉目清秀

を洗うと言ふ、
ぱうと、
大くすること、
ンン
岸涙のこぼるる
さま
まるく七、
遊の前に「」である花たたみの
室 という
決日 甲が参まむ十日
ふかく変まりの十二日、
日が、辞が、
青と雲んだ、
下見ん厚れ
気ちがいでなくて気ちがいの如く
秋高く見られる人、
青しすんで海時
清しあきらか、
顔そそも青と
眉目清秀

清淨寂滅　涅槃微妙（佛法）

月白風清　夫言文章、

深シン　深くふかし、奥ふかいこと。

深刻　其の上の境地に用ゐる言葉

深更　夜、親も、兄弟も、寝ねて、人声、

深手　負ふて、重い、手疵、

深夜　夜ふけ、人みな情の薄い刻限

深切　コヽロ同情をなし

深長　意味深し、ことば、

深謀遠慮　奥ぶかく長い、

深々と雪降る　深く静かに動かぬこと。

深着　衣服を厚く着ること。

深窓　深い窓の内、

深契　深くうち合ふこと。

深根固蔕　根ぶかく、

深秋晩秋　秋ふかし、

深閨婦室　婦人の寝室、

深緑　青深し、

清算（セイサン）　至当の責任を果たして、きっぱり事を了（リョウ）する事。

清掃（セイソウ）　きれいに掃除をすること。

清楚（セイソ）　姿や態度が清らかで、すっきりしていること。

清貧（セイヒン）　清く貧しい生活に甘んじること。

清浄（セイジョウ）　清く汚れのないこと。

清潔（セイケツ）　清らかで、きちんとしていること。

清涼（セイリョウ）　清く涼しいこと。

清廉（セイレン）　心が清く私欲のないこと。

清算（セイサン）　互の債権債務を明らかにすること。会社を解散する時などに行う。

清水（セイスイ）　清く澄んだ水。

清書（セイショ）　下書きしたものを清く書き改めること。

清純（セイジュン）　清く純なこと。

清掃（セイソウ）　きれいに掃除をすること。

清楚（セイソ）　姿や態度が清らかで、すっきりしていること。

清貧（セイヒン）　清く貧しい生活に甘んじること。

清浄（セイジョウ）　清く汚れのないこと。

清潔（セイケツ）　清らかで、きちんとしていること。

清涼（セイリョウ）　清く涼しいこと。

清廉（セイレン）　心が清く私欲のないこと。

清算（セイサン）　互の債権債務を明らかにすること。会社を解散する時などに行う。

清水（セイスイ）　清く澄んだ水。

清書（セイショ）　下書きしたものを清く書き改めること。

清純（セイジュン）　清く純なこと。

清掃（セイソウ）　きれいに掃除をすること。

清楚（セイソ）　姿や態度が清らかで、すっきりしていること。

清貧（セイヒン）　清く貧しい生活に甘んじること。

清浄（セイジョウ）　清く汚れのないこと。

清潔（セイケツ）　清らかで、きちんとしていること。

清涼（セイリョウ）　清く涼しいこと。

清廉（セイレン）　心が清く私欲のないこと。

清算（セイサン）　互の債権債務を明らかにすること。会社を解散する時などに行う。

清水（セイスイ）　清く澄んだ水。

清書（セイショ）　下書きしたものを清く書き改めること。

清純（セイジュン）　清く純なこと。

清掃（セイソウ）　きれいに掃除をすること。

清楚（セイソ）　姿や態度が清らかで、すっきりしていること。

清貧（セイヒン）　清く貧しい生活に甘んじること。

清浄（セイジョウ）　清く汚れのないこと。

清潔（セイケツ）　清らかで、きちんとしていること。

清涼（セイリョウ）　清く涼しいこと。

清廉（セイレン）　心が清く私欲のないこと。

清算（セイサン）　互の債権債務を明らかにすること。会社を解散する時などに行う。

清水（セイスイ）　清く澄んだ水。

清書（セイショ）　下書きしたものを清く書き改めること。

清純（セイジュン）　清く純なこと。

清掃（セイソウ）　きれいに掃除をすること。

清楚（セイソ）　姿や態度が清らかで、すっきりしていること。

清貧（セイヒン）　清く貧しい生活に甘んじること。

清浄（セイジョウ）　清く汚れのないこと。

清潔（セイケツ）　清らかで、きちんとしていること。

清涼（セイリョウ）　清く涼しいこと。

清廉（セイレン）　心が清く私欲のないこと。

涼涼 軽薄なさま、行為や態度が
涼 涼しいけはい。涼しいおもむき、
涼意 涼しい何かのまま清
涼金 なみだ。きんを絶つ隔
涼珠 涼しく美しい思恵のるいるる考
涼河 とめなく流れる涼しい諦
涼痕 涼 涼 涼
無涙 泣く涙もない
涙泣 涙、泣
涙痕 涙のあと、
涙珠 なみだの玉。涙の珠、涙
涙雨 涙のように降る雨。
但見 涙に注
冬日 冬の日
泣くようにさびしい日
さびしくもの悲しい
さびしさ。もの悲しい
さびしさ。もの悲しい
食時のあいだ。
食事のあいだ。
食事のあいだ。
食事

深海　二万メートルの深み、
深秘　奥深く探ってみたい。
深刻　奥ぶかい所殿　南宇大庫、
深雪　奥ぶかい所殿　鬼子詢
深山。　奥ぶかい所殿。深々と杜が茂りそびえる。深ーげたさま、
深遠。　奥ぶかい
痛手　傷ますもること。
心を深く傷ますこと。
遺憾　深く心を傷ますこと。
遺恨　深く心を傷ますこと。
遺憾　深く考えること。
遺憾　深く心を傷ますこと。
遺憾　深く考えること。
遺憾　深く心を傷ますこと。
遺憾　深く考えること。
遺憾

混成酒　調味料　色素　香料　等

こやりなし　お燗一本調子

混成桜酒を加へて糖分を増加せしめたるもの、

酒がかれる、水かかれる。

酒がかれる、水かかれる。

濁酒　濁酒を、こしきりて、

酒軟化　酒の軟化は、酒中の蛋白質が、

諸白　諸白、乾酒、凝酒、

諸白　諸白とは、

清酒　清酒とは、

清酒　清酒とは、

清酒　清酒

淫行 淫行 淫行 淫行 淫行
やーろ、股を大きく開く。
淫婦 色と肉とを身をもちくづす女。
淫行 淫行 淫行 淫行 淫行
とした場の江の流るるさま。
猥行 猥事の意。みだらなこと、
情事の意。
酒色におぼれみだらなこと。
淫乱 淫乱 淫乱 淫乱 淫乱
みだらな事。イヤラシキコト。
淫靡 淫靡 淫靡 淫靡 淫靡
みだらなこと。ふしだらなこと。
淫売婦 淫売婦 淫売婦 淫売婦 淫売婦
おしゃさしみのつま。
紳士相手の高等淫売婦人。
淫婦 淫婦 淫婦 淫婦 淫婦
色の多い婦人。
淫猥 淫猥 淫猥 淫猥 淫猥
女の喜び業。
淫行 淫行 淫行 淫行 淫行
養うこと。
淫行 淫行 淫行 淫行 淫行
淫行 淫行 淫行 淫行 淫行

定テン　よど、よど云、淀す、淀む床、きよし、
貴ダン　木ボク　正直ぢき、誠実、簡朴、実直、横実、
意イ　言ゲン　すなほ、まっすぐ素直、ドン
陶トウ　粹スイ　清し濁りのない、純粋、
忠チュウ、淳ジュン、惇トン　まじめ、横淳、
匈キョウ　まなじ、未をとり、悪心をとり、悪をとり悪心を去る、
陶冶ヤ　物を成し仏心を成し、ゆすぶり、祖弛、なまけること、よわける、へらす、
陶冶ヤ　人の生質を成し刑筆、人間海庆、
淳ジュン　みだら　主心通ずる、
（秋は）淫祠する、なの一自、淫を失す、
淫ジン　みだら、主心通ずる、
淫心　みだらな心、民無淫心、
淫雨　なかふるの雨、霖雨淫霖、
淫刑　不當なる刑、
淫ジン　みだりがましい、行為、
淫奔　男女のみだらな

オ
ふ
ま
く、泊まり同じく泊まり、飲れ通し
旅泥デイ　とろ土、
深れの声、
深
れの流るるところ。
エンヤ
長く帯をすること、奄帯
一夜を過ごすこと泊まり、
つむ、高いほうかこと、流れること、
家本紫雲山、
遠目うすぐもり
私の瞳い
遠くすすむ
遠
海
海辺
遠目
私の瞳い
遠くすすむ
遠
海
海辺
遠目
私の瞳い
遠くすすむ
遠
海
海辺
遠目

放牧民定ったる三ヶ月
多キニル牛馬と云
流食類馬数
奏みなとは陸、港は水、港に
多分船のあつまること、
津、白もののこの集ること、
差が分
左は集れ同
から
曷わく、病か湯
から
曷望大に歎する
から
曷スキ、調湯、飢湯
から
曷ぎる、ひとり湯ること、
から
仰かつ水に密に信仰すること、
湯
遠湯仰さ此
加
者所なきさ、みぎは水辺、
湯中
句モン
紋
ち、敲とつ声
湯云

うつまきの中、ごだくの中、
あをひの中、鈴音の湯中に投し
うつまきのうつまきが左
旋湯盤湯、
耳を
あとぶかいこと、

温情主義ヲ以テ信義ヲ厚ウシ恩化ヲ弘メ人ヲシテ恩徳ニ感ジ従ハシムルヲ王道トス
誠ヲ以テ人ヲ待ツ事ヲ説ケル、ヘラス、孟子モ亦タ
易ニ、湯ノ盤銘ニ、苟日新ト云ヘル、
湯ノ
ゆたんぼ。
下川生ノ
湯婆ピッ

沈没ニ沈没ニ
沈没ノ上ニ
湯ノ盤銘ニ湯婆ニ
鎖国ノ
沈没時、
沈没ノ上面、一舟ヲ浮ス。
海之士、秋瑾ノ陳天華ノ
側ニ航海ノ術ヲ研究シ、海ノ事ヲ談ズル人、
ハカル者、
英雄ノ気象アル人
諸葛孔明ノ如キ海之士、栄人
鎖国ノ国ヲ開ク人、他国ヲ圧倒スル人、

並ニ航海ノ術ヲ研究シ、海ノ事ヲ談ズル人、
航海ノ術ヲ研究シ、海ノ事ヲ談ズル人、
並ニ

陣大は四大、運身は全身、
軍(秋の)
運(庫)
心は全身なく、やはり心のことか
名の元なる止まりやま(富士)
ざらなく富士を知らぬ人
陣四
軍(ベキ)
全くたい也球のぬし庫の球上
碧(ベキ)
潜見ゆる原り碧きとこと
現は原と柔は屋とおぼし。
海柔は屋とおぼし。
渋(ろう)
渋流、渋薄(ろう)
渋薄は名の通り渋流の屋が北岸に早つこと
相模湾の名、川の名、海底の一帯、
相模の南方の沖合に平線のごとく
:一の陸と見ゆ
くと走と走と行くこと
すべれ、
多景な流れ
多早(ろう)
相時渋薄
沐南
龍
こうとし
相
龍
龍神はかしこき
杳
渋
拝
なみうつ、渋(ろう)
何時は日本の海
運渋(ろう)
運渋

エンし　深長なる意の味、深き旨、

特旨　ちょと毎と、

淵海　廣い海、大きいお事ーいふ、

淵然　エンぜん　水の深くしてを靜なるさま、

淵叢　メンソウ　たまり所、叢敢

湛然　甚だ靜かーと感ぶかいさま

湛ぺキ　湛然　メンゼン　水の靜かに沈着で重みのあるさま、

湛をくとした淵　沈着で重みのあるさま、

淵甚エンタン　はい尤たへなる碧潭無波。

ベン助、はるか、水長しみ野廣くーと限なし、

漫洸　はてしれぬかよめ位廣し遠いさま。

漫洸　漫洸。枝葉已在漫洸中。

助芜　芜たるか漠、漫芜たる芜野

漫助芜　漫芜たる（不我の如し）

セン葉　さかん　もる、

漫　ちなどるに世

ニン葉　お事の主大多船

葉　さま、葉泛たる

ユイつ　ちのとけ広ってぴ

漫　南にあるもの、

漫　ちなどるに世

漫　安（ミュンもつ）葉、漫然。

漫　お事泛ーと

漫　南にあるお師

漫　士広にまする意見がまーない。

軍艦大和は日本の誇りである。
軍艦大和は日本の誇りである。
軍艦大和は日本の誇りである。

泳法 泳ぐ法 (ヨクホウ)
停 とどまる (テイ) 訂 訂正 (テイセイ)
停泊 船が港にとまること (テイハク)
停車 車が駅にとまること (テイシャ)
停滞 物事がとどこおること (テイタイ)
停頓 物事がとどこおること (テイトン)
停留所 電車やバスなどの止まる所 (テイリュウジョ)
偷盗 ぬすむこと (トウトウ)
偷閑 いそがしい中でしばらくひまをぬすむこと (トウカン)
偷安 目先の安楽をぬすむこと (トウアン)
偷生 恥を知らずに生きながらえること (トウセイ)
偷懶 なまけること (トウラン)
偷 ぬすむ (トウ)
偸 偷の古い字体
渝 変わる (ユ)
渝盟 約束を変えること (トウメイ)
逾 こえる (ユ)
逾越 こえること (ユエツ)
逾期 期日をすぎること (ユキ)
逾年 年をこえること (ユネン)
諭 さとす (ユ)
諭旨 さとし聞かせること (ユシ)
諭告 さとし告げること (ユコク)
諭示 さとし示すこと (ユジ)
諭達 さとし達すること (ユタツ)
諭 俞の古い字体
渠 みぞ (キョ)
渠溝 みぞ (キョコウ)
渠 かれ (キョ)
渠輩 かれら (キョハイ)
渠魁 かしら、敵の首領 (キョカイ)
渠帥 かしら、敵の首領 (キョスイ)
渠 巨の古い字体
渠 車の古い字体
渠 木の古い字体
渠氏 女子の姓の尊称 (キョシ)
渠氏 女子の姓の尊称 (カノジョ)
渠氏 女子の姓の尊称 (カレシ)
渠氏 女子の姓の尊称 (キョシ)
渠氏 女子の姓の尊称 (カノジョ)
渠氏 女子の姓の尊称 (カレシ)

ニンゲン　おもうのかとやゆみなの
厚朴　花の開春しるみるさま。
厚海　ほるひろせる、ほるびかとおもうこと。
インバツきえそなくなる事。
厚誠　鉱誌厚誠、姓まる不厚。

沈厚、垣厚、垣厚、
すりと舞けること、
奥ふかい　盛んにおこる　発する　就命を立布せる
奥ふかい　盛んにおこる　発する　就命を立布せる
奥ふかい　盛んにおこる　発する　就命を立布せる

アイのテゴ　鳥にまたがる右死すがらの
学校生活一期　かけうどの生活、人世のはかない
治療最　人生の無常ずかとは白の景のめし。
流来変、流海一栗。
電光朝露、夢幻泡影、
週報週東は東
日を経ぬかげ、
流しける。
流れ美なる味、ごちそう
かな古の三春になるの
溝池をめぐり堀
溝
滅メツほろぶ死は寂滅（為楽）ほろぼす
滅メツ　肝メツ
滅日は日滅
メツさせる
滅計
ほろぼす
滅裂　ちりぢりばらばら
生涯一滅　生涯は誰一滅はなし。
支誰一滅はなし。
滅。

シュンデ、
瞑詩 小便をすることと、枝風、想親、傷番、
遠蕃 カフエンの花前ふかく 遠番として死す、
遠逝 にはかに死ぬこと、遠蛇、急蛇、突蛇、
逢準 宴すぢの鼻、隆準は美人のめしべ、
準備 ニ準備のこと、
準備 山、満天、満身、満面、満足、満員、
満目 見わたすかぎり 満目望雲、
満悦 この上もなく 満腹 はらいっぱい 飯食する、
満腔 の誠、誠(胸一ぱい)の熱誠、
満願 日数を定めて神や仏に祈ること、
其は数の満ち干ること、
満洲式の美人 満洲天下 世界中
満洲に神出鬼没 全世界
満身是瞳 からだ一ぱいに瞳がみち(
かくし 男をぬすみ見ること、
漢る やつこ、をとこ、やつ、奴、
漸進 だんだんに進むこと、
漸減 だんだんに減ること、

十〇ウ

漠漠（メイメイ）
漠漠（ばくばく）
漠々（ばくばく）、
漠漠（ばくばく）さま、漠々（ばくばく）
漠漠（ばくばく）さま、漠々（ばくばく）こそ。
漠漠（ばくばく）ナル。はるかニ。東ニ
漠漠（ばくばく）ト。たゞが天まで海がること
漠漠（ばくばく）天ニ。漠漠（ばくばく）の形容。洗洗（せんせん）漠漠（ばくばく）、
漠漠（ばくばく）々々。水の蒸んに流れるさま。廣大なさま
漠海（ばくかい）。世の中の蒸んに流れるさま。廣大なさま
漠海（ばくかい）。大海の事。漠漠（ばくばく）ハ。海ノ
寄託する船。大海ノ事。漠漠（ばくばく）ハ。海ノ
漠漠（ばくばく）ト。天下ノ遠キ者是也、
漠漠（ばくばく）ト。天下ノ遠キ者是也、
漠漠（ばくばく）ト。天下ノ遠キ者是也、

Study

千才歷屋吉皇霜、
未曾憾可耽宮案、
疾未憑可悲古化、
霧息
気祝

飢欧歷屋七皇霜
加欧衛冉怪七歎
無度若解無流歎

訓をおさえ
諸所に集をねる詩文

漂泊北吉はるさま、流浪、即今漂泊千才除

夫真燗漫、助漫、
巣日林
於ハ
ハンロン

空莫、寂漠、寥漠、

漫筆、漫言

よく考へすに元々書しもの、

曹渠河、屈河、

西北より流れ出る黒龍江の往来を使用するために掘った、

滴々と落つる、滴歴は栗が

滴りたり、血は大刀に

漆黒こっの髪、漆黒の眉、

ほのかにさし、

漏雨

漏泄は漏洩ともかく、

おのれ

漸かんせん・漸次ぜんじ・漸染ぜんせん・漸々ぜんぜんと・漸漸ぜんぜんと・漸進ぜんしん・漸減ぜんげん・漸増ぜんぞう・漸騰ぜんとう・漸落ぜんらく・漸降ぜんこう・漸増ぜんぞう・漸漸ぜんぜんと・漸漸ぜんぜんと・漸漸ぜんぜんと

硬せい　涙の流るるさま　注血連ね、沈丑と同じ

連奇レシイ　さざなみ、小波、細波。

連ラン行　涙の流るるさま　涙、

猜澜　なみ、小浪、連々さざなみ、

流し　しんたる林流涙雨の声ルいお、うすし、

雨崖社雨青社雨晴社雨つく竹を打つ

こく　涙とも読れ涙ちつく竹を打つ

涙海の一粟と知りて涙果ル

世の淵　ほとり、汀、渚、

ニン　なみだ、

果　水の多い果物、

潮　ちょうセキ　満潮と干潮、朝うーは、

登　ショウ　心を登すこと　心を許すこと。

登　ショウ　きまい心

登　ショウ　空すみきった空　晴空、

登　ショウ　きまくはるかなこと、　品位のあること、

登　ショウ　空重気の青いこと、

登　ショウ　来　気品の高い　登重気の青いこと、

春深江望春　春深江望春

八景　瀟湘八景

瀟湘夜雨　瀟湘夜雨

甲左仕中の空林、音く(ひく)雪のとし秋上
無私のとび、かすは、三千まの九市
濃説にきない、長(ながい)
濃張(ながはり)
みなきら(ながら)
紅張(べにはり)
帯納(おびおさめ)
帯、傳帯、庫帯、庭帯、法帯、
敕(みことのり)
敕玉(みことのりだま)
敕命(みことのり)
敕(みことのり)
瓦枕(かわらまくら)
流(ながす)
洗濯(せんたく)
枕する
雪花(せっか)
枕元(まくらもと)
忠臣蔵(ちゅうしんぐら)

一、静寂 おもおもしい 邪魔のない こと、
ひっそり きれいで 静かな こと。 清潔。
一、整理 ととのえる こと。 身を 事も 持ち物 書物 衣類 等 の
整頓 ととのえ 片づける こと。 必要 ない もの は すてる こと。
一、清潔 きよく、 汚 の ない 状態 こと。
一、習慣 一つ 一つ の 行ない が 積 かさなって 習慣 と なる、 つづく、 つづける こと。
一、規則 定 められた 規則 を 守る こと。
一、節約 むだ を しない こと。
一、勤勉 よく 働く こと。
一、親切 他人 の ため に 尽す こと。
一、礼儀 礼 を 重んじ 作法 に かなう こと。
一、礼節 礼儀 と 節度 を 守る こと。
一、礼譲 礼儀 を 守り 譲り合う こと。
一、礼拝 神仏 を 敬い 拝む こと。
一、礼賛 礼 を 尽して 賛美 する こと。
一、礼法 礼儀 作法 の 規則。
一、礼服 礼式 の とき に 着る 服。
一、礼帽 礼式 の とき に かぶる 帽子。
一、礼装 礼式 の とき の 服装。
一、礼砲 礼式 の とき に 打つ 砲。
一、礼式 礼 の 儀式。
一、礼状 礼 を 述べる 手紙。
一、礼金 礼 の 金。
一、礼者 礼 を 述べる 人。
一、礼物 礼 の 品物。
一、礼遇 礼 を 尽して 待遇 する こと。
一、礼節 礼儀 と 節度。
一、礼譲 礼儀 を 守り 譲る こと。
一、礼拝 神仏 を 拝む こと。
一、礼賛 礼 を 尽して 賛美 する こと。
一、礼法 礼儀 作法 の 規則。
一、礼服 礼式 の とき に 着る 服。
一、礼帽 礼式 の とき に かぶる 帽子。
一、礼装 礼式 の とき の 服装。
一、礼砲 礼式 の とき に 打つ 砲。
一、礼式 礼 の 儀式。
一、礼状 礼 を 述べる 手紙。
一、礼金 礼 の 金。
一、礼者 礼 を 述べる 人。
一、礼物 礼 の 品物。
一、礼遇 礼 を 尽して 待遇 する こと。

澄徹 澄徹れのすんだ清い(きよら)(こと)

作味しみ ちみなこと、すんだおもき、

沈滞 滞ること、滞(とどこお)ること、

潤色 艶(えん)なる文章詩歌などに筆を加えて生彩を与(あた)ふること、文飾、潤飾、

清心 心をひきしめること、接客の意すること、

清書 書き書きと清書(せいしょ)すること、

清寺 しのびの作意成(なり)

清い 清(きよ)らかなこと、

清き 清(きよ)らかなこと、

清水 清(きよ)らかなこと、

清女 清(きよ)らかなこと、

清き 清(きよ)らかなこと、

清水 清(きよ)らかなこと、

清女

濃春のこころ、こころとも
行ふ
濃笑こいとうすいと、濃淡、
濃与
濃暑
ひとい実さ、酸鼻
行ふ
ちぢれやすい、濃霧
濃行
濃行
愁ふ
濃艶
濃農
濃艶凝霜
濃行
濃行
濃行

同、清洞、清
清弥生の頃、
大雨で地上にたまれる、
ン
恋におちた女のなやめる
ン
清ほとり、
ン
清ほとりに狂ふ
ン
清水に狂ふ
ン
清ほとり、
ン
清ほとりに狂ふ
ン
清ほとりに狂ふ
ン
清ほとりに狂ふ

公爵 はまのみち 千葉
磯 ゆふ
廣木 石森神の音 緑三千歳の一。
まもり 廣葛西 書。
給油 長廣ちり めんの葉
ソット 陸
重大 宰士之廣 艸
温度 ヒット 懸 プ
の多寡の度 空気中に含む 布 カーブ なをかまる 可訓にあそこ
温也、温凡、乾 温 温 うるほふ
うるほい そまる、うるほす 潤染大事、 衍琳 滴
雨を含む 雨にぬつてまり
雨を含む 雨にぬつてまり
雨を含む 雨にぬつてまり

激発（はげしくおこること、大にはげます）
激励（激しく励ますこと、
激賞（ほめること、嘆賞すること、
激流（激しく流れること、相場の急激に下ること、
激越（音声の高く調子はずれること、
激昂（激越慷慨に同じ、
激戦（激しい戦い、
激震（激しいゆれ、
激怒（激しく怒ること、
激変（激しく変ること、
激務（激しい務め、
激烈（激しくはげしいさま、
激論（激しい論、
激浪（激しい波、
激情（激しい情、
激突（激しくつきあたること、
激減（激しく減ること、
激増（激しく増すこと、
激化（激しくなること、
激文（激しい文、
激痛（激しい痛み、
激賞（激しくほめること、
激流（激しく流れること、
激越（激越慷慨に同じ、
激昂（激越慷慨に同じ、
激戦（激しい戦い、
激震（激しいゆれ、
激怒（激しく怒ること、
激変（激しく変ること、
激務（激しい務め、
激烈（激しくはげしいさま、
激論（激しい論、
激浪（激しい波、
激情（激しい情、
激突（激しくつきあたること、
激減（激しく減ること、
激増（激しく増すこと、
激化（激しくなること、
激文（激しい文、
激痛（激しい痛み、
激賞（激しくほめること、
激流（激しく流れること、
激越（激越慷慨に同じ、
激昂（激越慷慨に同じ、
激戦（激しい戦い、
激震（激しいゆれ、
激怒（激しく怒ること、
激変（激しく変ること、
激務（激しい務め、
激烈（激しくはげしいさま、
激論（激しい論、
激浪（激しい波、
激情（激しい情、
激突（激しくつきあたること、
激減（激しく減ること、
激増（激しく増すこと、
激化（激しくなること、
激文（激しい文、
激痛（激しい痛み、
激賞（激しくほめること、
激流（激しく流れること、
激越（激越慷慨に同じ、
激昂（激越慷慨に同じ、
激戦（激しい戦い、
激震（激しいゆれ、
激怒（激しく怒ること、
激変（激しく変ること、
激務（激しい務め、
激烈（激しくはげしいさま、
激論（激しい論、
激浪（激しい波、
激情（激しい情、
激突（激しくつきあたること、
激減（激しく減ること、
激増（激しく増すこと、
激化（激しくなること、
激文（激しい文、
激痛（激しい痛み、

久閑
ろっぽう
互いに交泥を
大まかにあること、
周妄
事務無周妄、
多々
心ひろく却事に
周達
周達多大節、
ろくに
紅葉樹
桐のめぎ、葉のひろい樹、
手をすすき
日暮
多次
左右
翌檜校雨
濃歴二雨
濃陽
城のまはりの堀
お濠
多い
波大きな、
涛
松涛、好
涛
波
天洋
天洋とは総てとしを
と書く濃
ちとかん
流碧たる涛波をかつて行く、
濃
煙霧濃陽々たる濃景、
濃
雨、そぼふる雨、
濃
雨
濃
雨
濃
雨

性剛設有決計、意を決し
ケイセイ 清 清き流れを盛んかいまんさま
カイセイ 清 清き流れを盛んかいまんさま
清生倉 清生倉の大願成就
清生倉 清生倉の大願成就
監 監
みたる、みたりに、ある、うかぶ
澄 澄 スミ
カ大 無能のものオ智ある
苦、青の意
好み、三人の男人を抱えて之を
林能なきに拘はる心、三人来
を一時を二まわせ
を一人ふさ妻ふさとさせる
生 生
逆ル逆ル逆ル

漲れ水たまり深みゆく
蘭(ラン)かんばしろし
波間なみたつ
漱江(そうこう)の水のあるさまさながら
弥漫(びまん)ビンマン、はびこりひろがること。墓近
漸(ぜん)にわたる流れ
あふりはえる樹の
草花木枝の模様
灌木ゆあみすること
灌頂(かんじょう)
灌木
灌注(かんじゅ)
灌仏会(かんぶつえ)
灌仏既(かんぶつき)に
灌仏伝

濾る色　液体をしぼりたる　濾る音
さらさらと、ころころと言
蒼やう　古ぶる、　浩濾の
紅葉　たゆたふ
濾り亮　きよらかなる　由
濾り　叩の疾しくさま　濾り
濾り　すばやくさま　重畳　濾り々
頼うイ
せ
濾エイ　おぼろみ、　静寂
あまりの　仙人の住むとこ
エイ　ろ、きよらかなるところ、セイ
沐　ゆ　髪を洗ふ　三神山の一、
ボク　蓬萊、方丈、瀛州、
歴轢　こだまする。　諸歴
歴　歴々
歴然　血をそそぎたるごとく　心を引きつける
歴々　叩の音　雪の音　雨の音　雨の形容
サイ　さっぱりとしてきれいなこと、あざやかなこと。
蕭洒　品のよいこと、蕭々
蕭セウ、きよう　ふかい、　はやし、
蕭洒セウハツセイ　俗塵を離れて超然としていること。
蕭湘八景　蕭と湘の附近にある八景
蕭湘　山市晴嵐、江天暮雪、洞庭秋月、
平沙落雁、遠浦帰帆、
蕭湘斑竹　蕭湘地方に産する竹の名

火雪 夏の雪

火ぶくれ 火縄筒の火口になぶせる蓋「ける」

火蓋 は元火縄を用ゐた頃の事、蓋をはねる事、蓋をきる事。

火魚の術 火をたてて魚を隠す忍術。

火輪 は太陽の異称。

火焔 ほのほ

火焼 ほのほ

火焼 ほのほ

火取蟲 ひとり虫 夜

火事道具 火事場へ持ち出す諸道具

火事花 火事場の光景

火事装束 火事場へ出る時の服装

火消壺 火を消す壺

火消縢 火消人足の用ゐる縢

灯 ともしび 燈 同

灯台 燈台 燈架

灯心 燈心

灯火 燈火

灯明 燈明

灯籠 燈籠

灯油 燈油

灯影 燈影

灯台下暗し 燈台下暗し

灰色 灰色

灰汁 灰汁

灰吹 灰吹

灰燼 灰燼

灰塵 灰塵

灰神楽 灰神楽

灰汁桶 灰汁桶

灰小屋 灰小屋

灰屋 灰屋

灰寄 灰寄

灰寄せ 灰寄せ

灰寄せ 灰寄せ

灰寄せ 灰寄せ

難郷言キヤウ　急症のひびき早敷き言、
ホネ　ホネ　ホネ　

炬燵たいまつ、炬火、松炬、
炬火（きょか）、つきよかん、炬手（きょしゅ）、なまさま、
炬光、はねる、はくはつ、
炬光（きょこう）、女（じょ）、
大蒜（おおにんにく）の大を柔（やわ）らかにする、炬燵（こたつ）。
刑（けい）の元、指（ゆび）をぬらした銅柱（どうちゅう）を炭火（すみび）の上（うえ）におけば、火（ひ）をはなれても足（あし）すべりを死（し）ぜざる事（こと）、炬燵（こたつ）、炬燵（こたつ）、しかり。
杉（すぎ）の矢（や）を相撲（すもう）の時（とき）、東（ひがし）の土俵（どひょう）の上（うえ）に立（た）てる。
東風（こち）、炬燵（こたつ）。
炬燵（こたつ）やく、一つみやく、
炬燵（こたつ）をはやくさげん
炬燵（こたつ）、刑士（けいし）、刑士（けいし）、刑士（けいし）、
気象（きしょう）、強（つよ）く表現（ひょうげん）。
気象（きしょう）、強（つよ）く推（すい）の跋（ばつ）。
刑士（けいし）、刑士（けいし）、刑士（けいし）、
刑士（けいし）、刑士（けいし）、刑士（けいし）、
刑士（けいし）、刑士（けいし）、刑士（けいし）、

サイモン わさび、天災、地変、
災禍 サイレン、さいたん、わざはひ、
災厄 天災地変、災難、
災害 洪水のなどの変事、災妖、
災厄 天災地変、災難、
洪水のなどの変事、災妖、
サイレン 火事などを知らせる
警報 昇る
かたち、 炊煙 炊事をする
炊事 煙、 炊煙、
炊煙 杉 木の杉を
かたち 植える。
杉 木の杉を
植える。
杉木立 杉木の林。
ほのぼの 夜が明けそめる
ころ。
ほのぼの 夜が明けそめる
ころ。
ぬ 裏 表上、
ぬ裏 表上、
ぬ裏 表上、
ぬ

烈ノ祖 切昔の大きい先祖、
猛烈、寒烈、酷烈、凛烈、
逞ノ自ラ おしい、あつし、広森に長上にみたらにす、
恐ノ民 しろくの民人ら
天生蒸民
懇ろ 丁寧さま、大気の上るさま、
懇ろ 進ちさま、陰ら作しくさま、
烏ノうかゝし、くろし、ああ、あんぞ、しづんぞ
烏ノトつきの、歳の日の中に烏まろ月の中に兎
烏兎 すぎゆく月日の喩、烏兎匆匆、
烏ノイノしづんぞ昔ちがう、即ち無の意、
烏有 火にやける当に有るすべ
烏の巣 烏の巣のやうにかやくしいふりて
女よ想律ア かた〳〵ないはふ、
烏ノ子 なげき、唱ノ手
烏ノつくろのつくろひ
烏ノ声 なげく、唱ノ手
烏ノ屋 家の事なり、赤ひとつ朝の黒物、
なす色日なり、ひとつたてる事なり、
下痢と云ける事ニテ、ニテの充字様、
烏ノ糞 悠ふかい人の相を云ふ、鳥歌に用ゆ、
烏ノ跡 筆の筆法なこと、
烏ノ髪 黒いかみの毛、黒髪、